

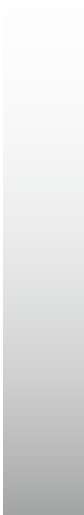
スーパー アトラス 物語

平井
龍



ブルーアトラス物語

● 前編



第一章 出会いと始まり

平井龍が夕陽が丘のマンションに引っ越して来てから五年目が経っていた。

夕陽が丘は仙台市の西に位置しており数棟のマンション群を一軒家を取り囲むように造成された、市街地から三〇分くらいの高台にあった。

この物語は、そんな地域に結成されたオヤジバンドの、歳は食っているがまさに青春ドラマである。

五月の爽やかな風が、マンションの敷地内に見事に生い茂った新緑の木々の間を静かに流れていた。そんな心地よい日曜の朝、龍は廃品回収の新聞を重そうにして階段を下りていた。龍は三階に住んでいたのでエレベーターはあまり利用しない。不機嫌そうな顔で両手に新聞の束を持って外の廃品回収置場にポンと置いた。

後ろから「おはようございます」と声を掛けられた。

同じ棟に住んでいる人だとは思うが名前は分からない。やっぱり新聞の束を重そうに持っていた。マンションの住民は隣近所の付き合いが薄い。隣りに住んでる人とさえめったに会うことがない。

でも、龍はニコッと笑顔を作って「おはようございます」と挨拶を交わした。

マンションの一階のエントランスホールに掲示板がある。色々な連絡の紙が整然と貼られていた。

管理組合の連絡だったり、町内会の連絡だったり。あまりそれらに興味のない龍はその場所に立ち止まって眺めることはまずない。それでもカラーで「バンドー」の赤い太い文字が龍の目に飛び込んできた。

「ん、なんだ、バンドメンバー募集？ ふん」A4の紙にプリントされたその大きな文字がポスターからはみだしそうになっていた。

部屋に戻った龍は、

「バンドやりませんか、ポスター貼ってあったよ」とゴロンとソファに横になりながら本を読んでいた娘の真保に話し掛けた。

「へえ、やってみたら。昔やってたんでしょ？」あまり興味はなさそうではあったが、答えた。

真保は小学校からずっとブラスバンドで活躍していた。龍は音楽のことについては娘の足元にもおよばない。でも真保が小さいとき父親がギターを弾きながら歌っていた姿は、真保が音楽の道を選ぶきっかけにはなっていたはずだと、龍は勝手に思っていた。

次の日曜日になっても、そのポスターは貼りっぱなしになっていた。あれ以来、掲示板を横切る度に龍は気になり始めていた。

龍が初めてギターを手にしたのは高校二年生の夏だった。龍の兄がエレキギターを買ってきて「龍！お前ベンチャーズ、知ってか〜！」と友達とバンドを作るんだと聞かされたのがきっかけだった。

「かっこいいんでろ」「へ〜、これがエレキギターっかあ〜」

「ちよっと触らせろ〜」「手あかつけんなよ」とかなんとか言いながらギターを抱いてみた。

ズシッと肩に食い込む感じ「重いので〜」弦を弾いてみた。「なにこれ？全然いい音しねの〜」

「アンプに繋がないと音でねんだ！」「アンプはね〜の？」「金ね〜から楽器屋にいつて借りて練習すんだよ〜」随分と不便なものだなあ〜と思ったものだ。

それでも時折りラジオから流れてくるベンチャーズのサウンドに「これは一体なんだ〜？」と今まで聞いたことのないサウンドは高校生の龍にはショックで、新鮮で、兄貴がうらやましくて仕方なかった。

半年もすると兄貴はエレキに熱が冷めたのか、今度はフォークギターを持ってきた。エレキバンドの話はそのあとあまり聞いたことがないので、おそらくすぐに解散したんだと思う。どこかで演奏したという話しもついに聞いたことはなかった。

当時の月刊誌で「平凡」とか「明星」という雑誌の附録によく歌の小冊子がついてきた。当時の流行歌の歌詞と楽譜が載っていた。その楽譜の中に、CとかAmとかG7とか記号が書いてあった。

「Cとかってなんなの？」「兄貴に聞くとそれは「コード」っていうんだよ。」「ドミンとかって学校で習ったべ」「ああ〜和音」「んだ。それだよ」

「それで、どうするのこの和音を…」「Cはドミソだからギターのドとミとソと高いドをこうして押さえるんだよ」「そして?」「そして、上から下に弾くんだよ」「違うーバラバラじゃなくて、一気にポロンって弾くんだよ」

驚きだった。きれいな和音ではなかったが、そのポロンを弾きながら歌を歌うと…。「すっげえ、歌と合ってるー格好いい」「んだから、そうやって伴奏すんだよ」と兄貴は得意そうだった。兄貴から習ったことは沢山あったけど、悪いことばかり。ただ、このコードというものを教えてもらったことには今でも感謝している龍だった。

時代は橋幸夫・舟木一夫・西郷輝彦の御三家に始まって青春演歌歌手が次々とデビューし、一方ではザ・ピーナッツ、中尾ミエ、弘田三枝子、坂本九、パラダイスキング等々の和製ポップスの流行もあり日本の音楽が少し変わり始めた六〇年代中半である。そんな時にラジオから流れ出したベンチャーズの「ダイヤモンドヘッド」のサウンドは今までに聞いたことのない強烈な印象だった。あつという間に龍の住んでいた東北の田舎の町でもエレキを背負って闊歩する若者達が増えた。

そして若者の心を掴んだのが東宝映画の若大将シリーズ、加山雄三であった。映画「エレキの若大将」で作詞作曲（当時はシンガーソングライターなどということばはなかったと思う。）した「君といつまでも」は今でも歌われる名曲である。その映画の中に登場した（確かそば屋の出前持ちの役?）寺内タケシはその後、日本のエレキの神様の存在になっていくのだが…。

映画の中でエレキ合戦なるものがあって加山雄三と寺内タケシ等がバンドを組んで参加、優勝するという…初めてエレキバンドの格好良さを知った高校生の龍は感動したものである。

その後、ビートルズに影響された若者が、日本のGSブームを引き起こし、加えてフォークソング…ロック、ニューミュージック…そしてJ・POPSへと日本の音楽は進んで行った…のだ。

そんな時代背景の中で、龍も高校を卒業して入社した会社の仲間とエレキバンドを作った。ただ、初めてギターを手にする者ばかりでバンドといってもお恥ずかしいものであった。（この物語も面白いのだが、その話はまたの機会にして…）そんなバンドも二年であっさり解散してしまったので、龍のバンド経験はたったこれだけでしかなかったのだ。

龍がバンドのポスターを気にしながらも動けなかったのは、龍にはそんなバンド経験しかない自信のなさであった。でもそれでも気になる…。龍は何度も何度もそのポスターを読み返していた。

どうしようかな～と思っていた時に「たかが町内のオヤジが集まってやるバンドじゃないの、つまらなかつたらやめればいいでしょう…」と煮えきれない龍に真保が言った。

「そっか、そっだよな。どうせ町内のオヤジ達の集まりだよな。つまらなかつたらすぐやめれば

いいつか…。」そう思うと気が楽になった龍はダイヤルを廻し始めた。いつも決めるまでは慎重だが事が決まるとすぐに動き出すところが龍にはあった。

「あの、バンドの件でお電話したのですが」 龍は少し緊張していた。

相手は甘谷と名乗るとすぐに「はい、どうも。楽器はなにやれますかあ?」と聞いてきた。

「え、ギターです。コードを弾ける程度ですが…」 急に聞かれたので龍は慌てて答えた。

「あつ、そうですか…ギターは三人応募があつて…」 少し冷めた感じだった。

「そ、そうですか…じゃ、もう一杯ですよね」何故かホッとした龍であった。

「ベースが私で、ドラムももう居るんですよ。キーボードがないから、キーボードならすぐに欲しいんだけど…」

「じゃ、いいんですよ。無理に…」 諦めながら龍は答えた。電話を切ろうとするじ、

電話の相手も申し訳ないと思ったのか

「でも折角ですから、どうです、もうメンバー五人揃ったので集まろうと思うんだけど…」

「はあ…」 龍は本心はヤバイことになったな〜と思った。でも大したことなさそうだし、嫌な
らやめればいいんだから…と龍はまた開きなおった。

「今度の日曜日スタンドの前のレストランでどうですか？時間は三時では？」

「はあ、いいですよ…」 とは言ったもののやはり自信のない龍であった。

そして、次の日曜日がやってきた。約束は三時だったが朝からず〜っと落ち着かない龍だった。
さ〜て、どんなやつが来るのかな〜。不安と期待が入り交じりながら、約束の五分钟前に龍はスタ
ンドの前のレストランに入っていった。

店内をキョロキョロしていると

「あれ、平井さん」と四〇歳くらいの元気の良い、調子の良さそうな男がニコツと笑いながら声

を掛けてきた。

「私、同じ棟の花山です。管理組合でお世話になってる」

「あ、そうですよね。見たことある人だなって」

この男の人の名前が花山さんだと龍は初めてわかった。

「今日はなんですか？なんかの集まりですか？」と花山さんが聞いてきた。

「いや、今度バンドやることになってね」少し照れながら龍は答えた。

「はあ、バンドって…」花山さんは自分の顔に指さして「私も…」と口だけ動いていた。

「どうも、甘谷です」

「どうも平井です。先日はお電話で…」そんな挨拶をしてるうちに

「坂口です」

「権藤です」と次々に名乗ってきた。

名前を覚えるのが苦手な龍は、「は、はい…」と一生懸命に暗記しようとしていた。

「え、私、甘谷です。言い出しつぺなので、進めますが…」

「私は、ベースをやります。花山さんはドラムですが、問題はあとの二名がどのポジションで…」

「あのー、ところでどんな曲をやるんでしょうか？」 考えてみると一番肝心な話がまだしてなかったことに気がついて、龍は聞いてみた。

「あーそうでした。私は前のバンドでオールディーズをやってまして…あつゝ別にそれにこだわる気はないんだけど…」と甘谷さんが言うと

「私はビートルズがやりたくて…」と頭をかきながら一番若い坂口さんが言い出した。

花山さんは「あーいいですねー！」と言いながらヘラヘラと笑った。

権藤さんはさっきから無言である。

「平井さんは、どんなのを…」甘谷さんが聞いてきた。

「えー、私は昔はベンチャーズとか、GSとか、色々…」 (おいおい大丈夫、そんな大きなこと言って…。)

「あー、良いですねー！ベンチャーズ…」また花山さん。

「それでポジションは？」と聞いてきた。（あやゝポジションって…野球じゃないんだから…。）

「はい、当時はリードギターを…」（おいおい大丈夫ですか？）

「どんな曲を…」今度は甘谷さん。

「えーと、パイプラインとか朝日のアたる家とか…」（おいおいホントに弾けるの？）

「じゃ、とりあえずそれでいきますかー！」と甘谷さんがニコツとした。

「え？ビートルズは…」という坂口さんに…

「とりあえずベンチャーズをやるということで…ビートルズは難しいもんね」と甘谷さんは答えていたけど…坂口さんと事前にはどんな話しをしていたのか…気になった。坂口さんが少し不満げな顔をしていた。

それにしても、榎藤さんは何をやりたいのでしょうか？あまり話すことなくただうなずいていた。

その後、それぞれのバンド経験の話やら、音楽の話で盛り上がった。まるで少年のようにみんなの目は輝き、久しぶりに始まる新しい挑戦にワクワクしている様子が楽しかった。

音楽…その力は魔法のようだ。

今日初めて会ったこんなオヤジ達を一気に友達にしまった。

一気に青春時代に戻ってしまった。

あの少年時代の好奇心に満ちた目の輝きを一気に取り戻してしまった。

音楽の魔法にかかった五人のオヤジたちのバンドがいよいよ始まる。さて、一体どんなことになっていくのか。

第二章 屈辱の初練習

その日がついにやってきた。曇り空の少し肌寒い五月下旬の日曜日の午後三時、町内にある市民センターの二階が集場所だった。

……龍は「フォークギターしか持っていないけど」と先週のレストランでの打ち合わせの時に話した。「それならオレのエレキ使ってくださいですよ……」と言ってくれたのがドラム担当の花山さんだった。「じゃとりあえず……いいですか？お借りして……」ということになっていた。……

そんな訳で龍は手ぶらで三時ギリギリに着いた。

市民センターに入るのは初めてだった。スリッパに履き替えて中に入ると右側に白いボードがあった。「二階和室 バンド練習」と書いてあった。二階から、へえ、ここが市民センターっか。龍はキョロキョロしながら二階へと上がっていった。

「ごんに・ち……は……！」部屋に入ると龍は啞然とした。

三〇畳ほどの和室には入口右側にステージがある。そのステージの真ん中にはドラムセットがどっ

んと陣取り、それを挟むように大きめのアンプが数台、ギターが数本、ギタースタンドに出番はまだかと言わんばかりに立て掛けられていた。

え！もうここまで揃っていたの？この間の打ち合わせではこんな話しはなかったのに…。いや、バンドに参加するっていうことは、これは当たり前か…龍は自分の考えの甘さにがっかりした。ギターもなしでバンドに参加しようとした自分が浅はかだったか…。

「全員揃いました、やりますか」もうベースギターの重厚な音をさっきから響かせて今か今かという様子で、甘谷さんが皆に言葉をかけた。まるでバイクを空ふかししているライダーのようだった。

「平井さん、ギターあれ使っていいですよ」ニコツと花山さんが指さした。黒い色のギターがスタンドに置かれていた。

「は、はい…すみません…」もうすっかり気後れした龍だった。

「さて、なにやりますか」甘谷さんの声が聞こえないのか、皆それぞれ勝手に音を出して自分の世界に入り込んでるようであった。久しぶりの音の感触を楽しんでる様子…。ただ龍はチューニー

ングがまだうまくいかずにイライラしていた。

「平井さん、これ使って…」 みかねて甘谷さんが手のひらに入るくらいの小さな機械を持ってきて、「これでチューニングしてください…」 今は便利な物があるんだと初めて知った。そのチューニングマシンなるものを使って一弦づつ音を合わせていく。六弦。ボアオン……これは便利……ん!？」

「甘谷さん、これ…、どうなれば…、どうなるの……?」 なんかだんだん冷や汗が出てくる思いだった。冷たい視線を感じながら、それでもなんとか一弦までこぎ着いた。チューニングでこれでは先が思いやられる…そんな視線をいっばい浴びながら龍は「どうも、すいませ〜ん」明るく努めるのが精一杯だった。

「じゃ、平井さん、朝日のアたる家でも…」と甘谷さん、この間の話を忘れてなかったようであった。

「は、はい…」 (あゝあ、ほれ自業自得…)

「じゃ、イントロのここを…」といいながら、龍は自分で弾いてみせた。

「コード進行は、A m、C、D、F…でアルペジオで…。」知ってる専門用語を精一杯並べながら…ポロロ〜ン ポロロ〜ンと。

「いいですね〜」ドラムの花山さんが、合わせてきた。ベースも続く…。

「そのところは、私が…」権藤さんがイントロのアルペジオを弾きだした。

「あの〜、私は、なにを…」坂口さんが自信なさそうにしていた。

「なあ〜んだ〜、みんなやっぱり緊張してたんだ〜」ホッとした龍は

「じゃ〜、坂口さんはコードをストロークで…」手をシャンシャンと振りながら指示を出した。調子良すぎない…。平井さん。

龍は、権藤さんのイントロのアルペジオを聞いて、ここからというところで、ジャジャン〜 ジャジャ ジャジャジャジャジャ〜ン… 朝日のおたる家のメロディーを弾きだした。

……実はバンドで合わせるのは三十年前の会社の仲間と演奏して以来のことだった。そして、もうすぐ「朝日のおたる家」の演奏は終わってしまう…いや簡単に言うとなんかそれ以上は弾けないところに差しかかってしまうのを龍は知っていた。……

龍はある程度のところまでメロディーを弾くと「すいませ〜ん、ここからベンチャーズは速く弾くんですよ。私はそこは弾けないんですよ〜」と頭を掻いた。

「いや〜、あそこっから難しいんだよね〜」と苦笑いの甘谷さん。ガクッとおどけて持っていたスティックを落とす花山さん。ブスッとまだアルペジオを弾き続ける榎藤さん。なかなかついて来れなくてホツとしてる坂口さん。一瞬シィーンと音が止まった。

「パイプラインなんかは…」と、気を取り戻した甘谷さんが声を出した。

この曲もあのレストランで龍が言ったのを記憶していた。

「は、はい…」龍はまた「イントロは…」と言いながら、六弦と五弦を上手くミュートさせながら、ドテ、ドテ、ドテ…と弾きだした。

「い〜い、い〜い〜」花山さんがノリながらドラムを叩きだした。そして、甘谷さんのベースも…。

「じゃ、そこは私が…」ドツテ、ドツテ、ドツテ…少し弾き方を変えて榎藤さんが弾きだした。あ
りゃ…なんか挑戦的…。

「あのー、私は…」今度は自分でシャンシャンと手を振って見せたのは、若い坂口さん。そう、ストロークだね。

榎藤さんのイントロの音を聞きながら、ここというところで龍は弾きだした。シャンジャンジャッジャジャッ。出足好調。アンブから流れる音は、本当に久しぶりの快感であった。もちろん、弾きながらそんな余裕がある筈はないが、恐らくそんなパイプラインの演奏前半であった。

そして、お待ちかね。テケテケテケテケテケの入る小節が迫ってきた。ベンチャーズといえばこのテケテケである。龍は待ってましたとばかり、六弦をミュートさせながら、ピックを持った右の指を小刻みに震わせて……かなりの技術を要する作業なのです。実は…… テケテケテケテケテケテケテケ。どりゃー見せ場だー！

すると榎藤さんも負けずと…テケテケテケテケテケテケ。

「あれー」「はあ？」龍と榎藤さんは顔を見合わせたまま、一瞬音が止まってしまった。

「平井さん、テケテケはサイドギターが担当なので…はい」甘谷さんが呆れた顔で龍をみた。

「ほんとに…もー！」は言葉に出さない榎藤さんの引きつった顔…。

「はあ、そうなの？知らなかった」龍は本当に知らなかったのである。

その後である。

ジャンジャンジャーンジャッジャーン 急に聞き覚えのあるメロディー、そうパイプラインを目の前の権藤さんが弾きだしたのだ。つられるようにベース、ドラム、サイドギターが加わって演奏し始めた…そしてエンディングまで。一曲完成。それはいとも簡単に今まで何度も練習を重ねてきたバンドのように終わってしまった。

「な〜んだー、権藤さん上手いじゃないですか!」

「他には何が弾けるの〜」 その後は、何曲か聞き覚えのあるベンチャーズのサウンドが流れた。

龍の耳にはどの曲も同じように聞こえてきた。「できるなら初めっから言えよな…」ギターを肩から吊るしたまま畳に座り込んでただ四人の演奏を聴いてるしかなかった。

「たかが町内会のオヤジバンド…。大したことないだろう…。」がこの結果だった。「とても自分がやれるレベルじゃないな〜。ついていけないな〜」そんな思いだけが、ベンチャーズの演奏をBGMに膨らんでいった。

「平井さん、これバンドスコアです。今度やるときまで練習しておいて!」甘谷さんがコピーしてみんなの分を用意しておいてくれた。パイプライン、ダイヤモンドヘッド、ウォークドントラン、木

の葉の子守歌…ベンチャーズの代表曲ばかりだった。こんな楽譜を見るのも初めての龍はますます気が重くなっていった。

座り込んだまま龍は、みんなの演奏しているパイプラインのオタマジャクシを追っていたが、途中でどこを演奏しているのかさ分からなかった。楽譜を見ながらギターを弾いている真似をするのが精一杯の龍だった。もう顔をあげるのも辛くなっていた。

三時から五時までの練習は龍にとって、長い時間だった。もうやめようかな～が頭の中を駆け巡っていた。片付けが終わると「平井さん、このギター持っていて練習していいですよ。オレ使わないから～」花山さんがニコニコしながら「一緒に帰りますか～」と声を掛けてくれた。

市民センターから花山さんの車に乗せられて、五分もかからないうちにマンションの駐車場に着いた。同じ棟なので歩きながら「いや～花山さん、参りましたよ。みんな凄いですね」と龍が話しかけた。

「いや～、私もね～、あの榎藤さんがドラムの叩き方に色々言ってきて…。なんかどっかでドラムをやったみたいなんですよ～。プレッシャーだな…」

「え～、そうなんですか～。」

「どうしようかと思って…」

「ついていけないか自信ないっすよ…」意外な花山さんの話しだった。

「花山さんは大丈夫ですよ。私の方は恥をさらけ出した感じで…」

「正直言って、まいってます。」

二人はそれぞれ元気なく「じゃまた〜」ということとで別れた。

とにかく長い、長い日曜が終わった。

第三章 特訓！特訓の二週間

「疲れた～…ただいま～」さすがに元氣のない龍だった。花山さんに借りたエレキギターがやけに重く感じた。龍はギターを置くとその場に寝ころんでしまった。

「どうだった？」ソファに寝ころびながら真保が聞いた。

「う～ん。どうしようかな～、やめっよっかな～」

「俺のいく場所じゃなかったよ～、みんなすごいんだよ」と甘谷さんから貰った楽譜を出しながら、龍は落ち込んでいた。

バンドスコアと違って甘谷さんが言ってたけど。確かに楽譜をよくく見ると、リードギター、Rhythmギター、ベースギター、ドラム…とそれぞれのパートごとにおたまじゃくしが踊っていた。

「ん！？…四つのパートしかね～よな～。俺は必要ない…かな？」やつぱりまた沈む龍だった。

違う楽譜を見てるうちに、「ん～、Rhythmギターっていうのもあるね～。なんだ！これは…」確かにベンチャーズは四人だが楽譜には三番目のギター音が書かれてる…。

「そっか～、俺はここをやればいいのか…」なんとなく自分の居場所を見つけたような気がした。それにしてもRhythmギターは暇なパートだね。装飾音かな…、まあいいつか。氣を取り戻した龍は、ようやく夕食を摂る氣になった。

夕食後も、龍の頭の中には今日の屈辱的な思いと悔しさがいっぱいだった。しかし、生まれながらの負けず嫌いな性格は、このバンドを続けさせる原動力になったのは確かだ。一日でやめてしまう情けない結果だけはとりあえず回避できたのだった。

寝るまで龍は、楽譜から目を離すことはなかった。と同時に練習の時には飛んで見えたおたまじゃくしが、少しずつそのスピードが緩やかに見え始めてきた気がした。

次の日も、そして次の日も龍は夜は部屋に閉じこもってギターの練習に時間を潰した。事務所から帰るとレンタルビデオの映画を見るのが楽しみにしていた龍の生活は変わった。

ベンチャーズのCDを聞きながら目で楽譜を追いつながらの毎日が続いた。何回も何回も繰り返しCDを聞いていくうちに今まで何となく聞いて覚えていたメロディーやテンポがいかに適当に覚えていたかが分かった。これじゃ、バンドでみんなと合わせたらバラバラになるのも当たり前…。そんな基本的なところが今初めて気がついてる龍だった。

次の週の日曜日、龍は楽器屋で何やら探し物。エレキギターはアンプを通さないと全く寂しい音しか聞こえない。龍はアンプを買いに来たのだ。まだ自分のギターさえもってない龍…。まず自分のアンプを買っておこうと思いついたのだ。家での練習用なので30Wの小さなアンプを買った。

ボワーン…。アンプとエレキギターを繋いで、電源をいれてみた。そして、またCDを聞きなが

ら楽譜を追う…。昨日までの練習に比べると俄然雰囲気が出てきた。腕も確かに急速に上がってきた。コード進行もスムーズに指が動くようになってきた。

「うーん…らしくなってきたか」と少しだけ自信が生まれだした龍だったが、左の指は皮が剥け、昨日は薬指から血がにじんでいた。「痛っ！」ギターの弦が指に食い込む…、弦を押さえてもいい音が出ない…。新たな悩みが龍を襲っていたが、この経験は若い頃に知っていたので時間の問題と分かっていた。この痛みを乗り越えるとそのうち指の先がマメのように硬くなって痛さがなくなる。とにかくそれまでは辛抱だ。

痛みを抑えながら、龍の格闘は連夜続いた。次の練習は今度の日曜日に迫っていた。

龍にとっては悪夢のような初練習から二週間がたっていた。龍のこの二週間の特訓を知っているバンドメンバーは誰もいない。手ぶらでノコノコ出掛けた前回の練習とは違っていた。

肩にギターを引っかけ、右手にはアンプ、左手には楽譜の入った袋をもって、今回も市民センターの和室の部屋に入っていた。もう甘谷さんはベースギターのチューニングを終えて今日も今か今かと待っていた。

花山さんもドラムのセッティングをしながら「どうも、平井さん。あや、アンプ買ったのすか」

と言いながら今日も元気は良さそうだった。

「はー、小っちゃいけど、とりあえず…。マイアンプです。」隣りにいた甘谷さんも、ほーっという顔で、チューニングマシーンを手渡してくれた。あの初日にてこずったあのマシーンだ。

少しして榎藤さん、坂口さんも「こんにちはー」といいながら入ってきた。

龍はもうひとつ秘策を考えていた。バンドスコアだ。暗譜する自信はない。楽譜はゴチャゴチャと見づらいし、六ページにもまたがっている。龍は自分流に楽譜を書き直したのだ。小節ごとに大きくコードだけを書いて、イントロからエンディングまで見開きの二ページに。これだと楽譜台におくと見易くてなんとか曲の流れに追っていきそうな気がした。

「チューニングはいいゝすか？」リーダーの甘谷さんが声をかけた。「んじゃー、パイプラインやりますか」

当然のように榎藤さんがリードギター担当は暗黙の了解になっていた。問題は坂口さんと龍のサイドギターだ。

「どうしようねー」龍はスコアを見ながらCDを何度も何度も聞いたお陰で、パイプラインの構成がよく分かるまでになっていた。ベンチャーズにはあまり興味のない坂口さんは「分かんないっすゝ」と少し投げやり。

「じゃ、坂口さん、ここをジャンと流すように弾いてくれますか。そつビヨーンと…あと、ここ

からは…」龍はまるでリーダーにでもなったように、坂口さんに説明をしだした。

ケンケンケンケン、花山さんのスティックがカウントを切った。その合図でドテッドテッドテッドテッ……龍の五弦、六弦のミュート、ベースのヴォンヴォンヴォンヴォン……で始まった。ジャーン、ジャーン…坂口さんの出番だ。さっきの龍との打ち合わせ通り、目で合図しながら弾きだした。イントロがうまく進行した。

リードギターの榎藤さんが弾きだす。

「おー！いいぞー、ベンチャーズだー！気持ちイーイー！」龍のアンブからもブーンと音が流れていた。そして、あのテケテケテケテケテケのところだ。来たぜ、サイドギターの見せ場。テケテケテケテケー！「えっ！ん？」またしてもそこで止まった。

「平井さん、そこ長すぎくだわー」甘谷さんが手を横に振りながらそこで音を止めた。そこからまた、テケテケテケテケテケの特訓だ。榎藤さんがテケテケテケテケーと見本を見せるように弾いた。ベースも、ドラムも合わせてきた。「こんな感じで弾いてもらおうと…」何度繰り返しても、龍のテケテケテケは長すぎてどうしてもリズムに合わない。

またあの初めての練習の日の再現っか。さっきまでの少しの自信がまた崩れ始めた。

「うーん、イマイチ、タイミング合わないけど、まあそんな感じで…」と甘谷さんがとりあえず最後まで演奏しようということになった。リズム感が良くないんだろうか？簡単なようでなかなか思うようにはいかない龍は自分にイライラしていた。

まあそれでもイントロからエンディングまで通して演奏できるようになった。これはすごい記念すべき大進歩だった。この二週間の猛特訓とオリジナル楽譜の成果だった。

誰も前回と違う？と気付いてくれる訳でもない。誰もよくやったね〜と誉めてくれる訳でもない。それでも龍には手応えを感じた。これで下を向いたまま顔を上げられなかったあの屈辱の日からは一応立ち直ることができた…と。

第四章 ブルーアトラス誕生

二回目の練習が終わった。

「パイプライン」の他に「木の葉の子守歌」「ダイヤモンドヘッド」も同時に練習曲に加わった。もちろん龍はオリジナル楽譜は準備していたので何とかついていくことが出来た。このまま曲が増えて、練習を重ねていけばそのうちどこかで演奏することもあるかもしれない。そんな期待が膨らんだ。

片付けが終わって、市民センターを出る頃にはもう外は真っ暗になっていた。

「バンドの名前考えなきゃ…ね」と甘谷さんが言い出した。

「そうだよねー！なんかカッコいいの…」と言いながら花山さんも案はなさそうだった。他の人達も「うーん…」といったまま具体的な答えは出てこない。

「オージーズはどうですか？」甘谷さんが少し恥ずかしそうながら、もしかしたら受けてもらえるかな…と皆の顔を見回した。

「えっ…」「はっ…」「オジサン・バンドですか？」誰も目を輝かせる者は誰もいなかった。

「なんか、この地元に関係してるような… ね、折角この町内の人達だけで作ったバンドですから… ね、そのユー・ヒーズとか、チョーナイ・サウンズとか、ね…」龍はなんとかしようと皆に話しかけた。

その反応は「オーギーズ」より冴えなかった。

「なんとなくだけど、ブルーをつけてもいいかな…」と甘谷さん。

「ブルー・コメッツ…ですか。オーギーズよりは…ね」花山さんはニタニタしながら答えた。
月の明かりが立ち話をしている皆の顔を照らしていた。

龍は練習にも立ち話にも疲れていた。バンドの名前はなかなか決まりそうもなかった。

ふと、夜空を眺めた。あまりにも綺麗な星の群れと明るい大きな月だった。その空に向かって数棟のマンションが立っている。そのマンションの中にシンボルのようにひと際そびえ立つ33階の建物があつた。

「あのマンション、アトラスタワーっていうんだけど、アトラスってどんな意味…」とふっと独り言のようにつぶやいた。

「ね、ブルーアトラスってどうですかね？ゴロが良いと思わない！」これだ！と龍は直感した。

「それに、この地域のシンボリックで皆アトラスって馴染みある名前だし…ね、うん、いいよ。ブルーアトラス…うん。」

龍にはこういうところがある。これ！と思うと突っ走る…。

「まあ、一案として…」甘谷さんはまだ「オーギーズ」が捨てがたい様子だったが「アトラスの意味、調べておくから…」と付け加えた。

「そうですね。でも名前はあとで付いてくるものだから…、バンドで頑張れば、自然とね。」
龍は「これだ！ブルーアトラス…」ともう決めていた。

数日後、「平井さん、甘谷です」珍しく甘谷さんから電話だった。

「アトラスの意味だけど…ギリシャ神話で巨人族の神だって？わかる？あと、地図帖という意味もあるらしいよ…」

「巨人ね、なるほど、デカイ建物のはずだ」と龍は答えた。

そして「なんか意味もいじゃないすか…」「それでいきましようよ」龍は珍しく押した。

「そうだね、俺もなんかブルーアトラスが良い気がしてきたよ。あと今度の練習の時に皆に言うから…」

オーギーズをようやくあきらめた甘谷さんであった。

そんな二人の会話で「ブルーアトラス」は決まった。皆も「それで良い」ということになった。ようやくバンド名も決まって、「ブルーアトラス」が歩き出したのは梅雨に入った六月半ばのことだった。

六月の二回目の練習の日曜の午後だった。

「あのー、バンド名も決まったことだし、皆さんに相談なのですが…」練習の合間の休憩に、甘谷さんが座り直して話した。

「実はですね、五丁目の会長から今度の町内の夏祭りにバンド出てくれないかと頼まれて…。」と皆の顔を一回り見て様子を伺った。

「えっ、無理でしょう。まだ二カ月のバンドだよ。三曲しかやれないし…ね。」

花山さんがすぐ反応した。

坂口さんも手を横に振りながら、顔も一緒に横に振って、「そりゃ、ないでしょー!」と顔がそう言った。

「そうだね。」と応えを想像していたかのように甘谷さんが「無理だね、ねえ平井さんと権藤さんはどうですか…」と半分あきらめ顔で振り返りながら聞いてきた。

「夏祭りって、どんな感じなんですかね？見たことないから、私は…」と龍が言うと

「まあ盆踊りですよ、カラオケで歌うこともあったかな。ああそれに子供みこしが町内を練り歩くんだよね、それがメインみたいなお祭り…うちの子供が去年歩いたから…」と権藤さんが説明した。

「大したことないんだ、度胸試しってこともあるしね。秋の文化祭が目標でしたよね。我々のデビューは…」と龍はいつもの調子だ。

「うん、私も、その度胸試しにはいいかな…とね。どうですか、出ませんか？」甘谷さんがまた必死な顔で皆の顔を一回り見た。

「実は、五丁目の会長、私の友達で…」甘谷さんの本音がポロツと出た。

「え、出るんですか……」坂口さんが沈んだ声で確認してきた。

「出ましようよ。大したことないみたいだから…。ね、花山さんも…」いつの間にか龍は決めてしまっていた。

その場の雰囲気は出る方向に動いた。「無謀ですよ……」坂口さんは花山さんの顔を見ながら「ねえ、花山さんもそう思いますよね…」と同意を求めた。しかし「うーん…」と言ったまま花山さんの答えは出てこなかった。

少したって「皆さんが出てもいいというんならね」と花山さんは坂口さんの顔を見て少し気を使いなから話すと、一気に「じゃ、権藤さんもいいですかね？坂口さん、度胸試しですから…あくまでも…ねえ」と甘谷さんはみんなの顔を見回しながらホッとした表情を浮かべた。

「ところで、いいんですかね？こんな三曲くらいで…」龍は気になり出した。

「どんな打ち合わせになってるの？」

「いや、詳しくはまだだから、今度会長に会ったら聞いておくから…」

「なんせ、時間ないですから…、七月の末じゃ、あとひと月しかないですからね…」

「まあ、大丈夫でっしょ」

龍と甘谷さんの会話が続いた。

練習が終わって帰るときは、同じ棟の龍と花山さんはいつもマンションに着いてから立ち話をするようになっていた。

「ねえ平井さん、どう思うすか」と花山さんは、いつも練習のあと、話をしてきた。

この日も「坂口さんは出たくね〜んだよね」と年の近い二人の間では、そういう話しになっているみたいだった。

「花山さんは…?」

「オレはどっちでもいい。みんな出るっていえば…、ね〜。」

「私はね、折角のチャンスだからやってみたらと思うけど…、んでもね、ベンチャーズだけ三曲やつてもウケねえ〜と思うんだよね〜」

「という…?」

「GS（グループサ운드）でもいいから、歌をいれれば広がると思うんだけど…、花山さんどう思う?」

「GS、いいすね〜、それなら曲が増えるし…、甘谷さんはなんついうかだね〜」

「言ってみる…」

「いくら何でも三曲では…恥はかきたくね〜し」

龍は花山さんと同じく話してるうちに、段々とバンドでの自分の位置が分かってきた。

考えてみれば龍が最年長であった。老け顔のリーダーの甘谷さんは龍のひとつ年下なのをこの間初めて分かったのだ。

第五章 夏祭り初出演決定！

夏祭りの出演が決まった。

「平井さん、あのあと会長に話したら、是非やってってくれて頼まれて〜」甘谷さんからの電話だった。

「そっかあ、やるっきゃないね」龍はもうやるもんだと決めていた。

「ただね、曲数が少ないからなんか考えないと… すぐやれそうなGSとかね…」

「そうだね。考えておきまあす」GSにはあまり乗り気ではない様子ではあったが、甘谷さんは出演できそうなので、ほっとした様子であった。

急遽、夏祭りに向けての練習が予定外の土曜日から始まることになった。あと五週間しか時間はなかった。

市民センターのいつもの和室に入ると、

「平井さあん、坂口さん今日は出張だつて〜」と甘谷さんは元気がなかった。

「仕事なら仕方ないね〜」ギターをおきながら龍は嫌な予感がした。

セッティングが終わる頃、

「あの～夏祭りに出たいと思いますので～」甘谷さんが練習の前にミーティングを開こうと言いだした。

「七月の三〇日、土曜日です。」

「子供みこしが、町の中を巡ってる間にやってほしいそうです」

「あと、お礼金はですので～」ここだけは元気な声になっていた。

甘谷さんは続けさまに用件を話した。

その夏祭りの様子の分からない皆は、ただ黙ってうなずいていた。

「あの～、その子供みこしってどのくらいの時間かかるの？」龍は尋ねた。

「う～ん、三〇分くらいじゃないの～、俺もよく分からないんだけど…」

「ふ～ん…」ことの重要さにまだピーンときてない龍は、なにげにうなずいていた。

「ところで、GSの話だけど、曲数増やさないと…」龍がまた聞いた。

「うん、それで～ウチの会長がね、俺たちと同年輩で、と言っても私と平井さんとだけど…加山雄三の大ファンでさあ」

「それで、夜空の星を歌いたいんだってさっ…」

「スコアは用意しておきましたあ」準備のいい男である。

「加山雄三すかや〜」

「会長のバックバンドすかや〜」花山さんが皮肉った。

「ぼくの行くところに〜 ついておいでよ〜…」龍は歌ってみせた。

「あれね、イントロ格好良いよね」

「そう、そう…」みんなとにかく、音楽と格好いいのは大好きなのだ。

夏祭りの出演はなんとなく決まった。

「パイプライン」、「ダイヤモンドヘッド」、「ウォークドントラン」、「木の葉の子守歌」
ベンチャーズの四曲を坂口さん抜きで練習して、土曜日は終わった。

楽器を片づけながら

「ところで、明日、できれば練習したいんだけど…どお〜」

「会長にも来てもらって、歌合わせしたいんだけど…」

「いいですよ」全員一致で明日の練習も決まった。

「坂口さんにも連絡しておいて…」龍が言うと「はいよ」と甘谷さんはうなずいた。

次の日曜日は、朝から雨が降って肌寒い、冴えない日だった。

「今日は練習したくねえ…」朝からだるい龍は、疲れ気味であった。土、日の連チャンはきつかった。

それでも市民センターに着く頃には、ギターを持って「こんにちわ」とセンターの職員に声を掛けていた。

センターの中でも、バンドの存在は段々と大きいものになってきているようだ。

二階にあがっていつもの和室に入ると、坂口さんの姿がない。

「まだ来てないの?どうしたの?連絡は?」続けさまに龍は甘谷さんに聞いた。

「うーん、したけど、今日も出張だってさ…」甘谷さんは元気がなかった。

「ふーん…」龍は今日もまた嫌な予感がした。

五丁目の会長がくるまで加山雄三の「夜空の星」を龍がボーカルを担当して練習していた。歌ってる方が気楽な龍だったが、自分の歌唱力にはちょっぴり自信があった。

「イントロ格好良いよね」甘谷さんが言うと、

「へいさんの歌もなかなかだよ」

最近「へいさん」と呼ぶようになった花山さんが、エヘエへと笑いながら茶化した。

昨日渡されたスコアを見ながら、今日すぐに合わせて演奏できる…ブルーアトラスの腕前もかなり実力があがってきていた。

五丁目の町内会長がやってきたのは、練習も終わる頃であった。

「どうも、この度は…」愛想良くヘコヘコしながら、いかにも会長ですと言わんばかりに挨拶をした。

「さっそく、やりですかあ…」甘谷さんは、とにかく音を出したいのだ。

ジャカジャーン、ジャカジャーン、ジャカジャーン

僕のゆくところによ　ついておいでよ

夜空には　あんなに星が光る

自信ありげな会長さんだったが、口ほどではなかった。

「やっぱり、ナマに合わせるのは気持ちいい」

「こんなテンポですかね」と

バンドで歌うのは初めての様子で、顔を紅潮させながら興奮していた。

会長は三度バンドに合わせて歌って、来たときのようにヘコヘコしながら帰っていた。

とにかく、五丁目の町内会長が本番で歌うことが決まった。夏祭りの演奏まで、毎週日曜日練習することになった。それでもあと四回しかなかった。

「ハナちゃん、坂口さんはどうなの？」

最近、「へいさん」と呼ばれるかわりに龍は花山さんを「ハナちゃん」と呼ぶようになっていた。練習の帰りのいつもの二人だけの会話をしながら、龍は嫌な予感の話を始めた。

「坂口さん、やる気ないんじゃないの？」

「なにか聞いてないの？」

「うん。実はね…」ようやく話し出した。

「まだ、二ヶ月しか練習してないのに、うまくゆく筈がないって言ってた。」

「それに、みんなの前で恥をかきたくないし…。とにかく自信がないって…」

「そっかぁ、自信ね。オレも全然ないなぁ」龍は自分も同じだと思った。

「坂口さんはまだ若いから、周りの目も気になるよね。ハナちゃんはどうなの？」

「まあね。ただみんなでやるんだから… へいさんや甘谷さんについてゆくだけです」
珍しく真面目な顔をしていた。

花山さんは、いつもは調子のいい男だが、性格は真面目なヤツで、周りを和ませる天才的なところがあつた。

坂口さんの動向ははつきりしないが、まずやるしかない状況になった。

「じゃ、まずは今日はこの辺でお開きということで…」

「じゃ、また来週お願いします」花山さんは手を挙げながらエレベーターに乗り込んで行った。

第六章 夏祭り当日

あれ以来、坂口さんはずいぶん顔を出さなかった。

練習は土曜日も日曜日もやることになって夏祭りに備えた。それも一日三時間、ひたすらベンチャーズ四曲と「夜空の星」を何度も何度も繰り返し練習した。

練習の甲斐があって坂口さん抜きでなんとか格好はついてた。それなりに自信もついていた。

ただ、また問題が起こった。

「平井さあ〜ん、子供みこしだけど…、四〇分はかかるって…その間やってってくれて…」甘谷さんが言い出したのだ。

子供みこしは七町内会の子ども達がそれぞれ手作りしたみこしを町内を練り歩くという、以前からやっていた夏祭りのメイン企画であった。

「はあ、ベンチャーズは一曲三分もかからないよ。加山雄三だって三分くらい…、十五分で終わっちゃうよ…残りどうすんの？」龍は不安になってきた。

「同じ曲、繰り返しですかあ〜？」ハナちゃんは相変わらずだ。

「そうもいかないよね〜、平井さん、司会お願いしますね。適当にしゃべりをいれて、四〇分。大丈夫だよね…」

「大丈夫って…残りの二十五分、しゃべるの？」

「弁論大会じゃないんだから…」また、ハナちゃんだ。

「演奏終わったら、終わればいい…」榎藤さんがブツリと言った。

「まあ、終わるしかないよね」龍も同じ意見だった。

「でも、なんとか四〇分…。会長にもOKって言ってしまったし…」と必死の甘谷さん。

「やっぱり、弁論大会…、やるしかないよね。」龍もあきれ顔だった。

ブルーアトラスのデビューは七月の最後の土曜日…。市民センター広場で行われる夏祭りの前夜祭だった。

この地区の夏祭りは、二日間に渡って毎年行われている。らしい…。

なにせ、今まで一度も参加したことのない龍は、一体どんな雰囲気なのか皆目見当がつかなかった。観客がいて、その前で演奏をする…三〇年前に会社のビアパーティーやクリスマスパーティーで、ただジャカジャカ音を出して、へたくそなバンドでやったことはあったが、それは会社の中での話し。へたくそでも内輪のパーティーである。うまい、へたはさほど気にもしないで騒げば楽しかったし、それで満足していた。

ただ、今回は町内とはいっても、いろいろな人が聞きに来る。はず…。本番が近づくにつれてさす

がの龍も緊張してきた。

そして、いよいよその日はやってきた。

「ご苦労さんです」あの甘谷さんの五丁目の会長がテントからバンドを見つけると走ってきて挨拶した。

「今日はよろしく願います」バンドの皆は、いつもとは違って、妙に礼儀正しくお辞儀をしていた。やっぱり皆緊張していた。

「どこで、やればいいですか？」

「えーと、齊川さん」と会長が呼ぶと、振り向いて「わたし？」と指で自分を指しながら「ここを走ってくるおじいちゃん。」

「どうも、企画担当の齊川です。今日はよろしく願います」

「えー場所ね。適当にこのあたりで。本部席があっちで、子供みこしはこのあたりに最後に入りますので…」

「じゃ、この階段をステージにして、ちょうどいいですかね」

夏祭り会場の広場は、すり鉢のように市民センターの方から半周を二〇段ほどの階段で繋がっていた。本部席のテントと、食べ物のお店のテントが回りを囲んで、その中央に櫓がポツンと設置されて

いた。

ただっぴろい会場に、一体どこに向かって演奏したらいいものなのか？まして、この広い会場でブルーアトラスの用意したアンプでどこまで聞こえるのか…。

龍は野外での演奏の経験は初めて。音響のことなどまるで考えてもいなかった。他のメンバーも全然気にもしていなかったみたいだ。

「これじゃ、歌ってもぜんぜんダメだよね」

「うーん、ギターの音もこのアンプじゃ…」

「とにかくセッティングして、音を出してみるすかつ」

皆、急に元気もなくなり、声を出す者もいなくなった。

そんな時、龍の背後にチョビヒゲ、頭の毛の薄い、人の良さそうな目をしたオヤジが近づいてきた。

「あのー、私、今日と明日の音響を頼まれてる者だけど、カラオケと盆踊りのCD流すんですけど…」

「バンドやるんですか？」とそのオヤジは聞いてきた。

「どうも。このアンブじゃここでは…無理かなと思ってたところ～」
手を動かしながら、そのオヤジに龍は答えた。

「初めからバンドやるって言うてくれればね、ウチの方でも用意したのに」

「えっ？ ミキサーとか、でかいスピーカーとかあるんすかあ？」

「はい、あっちこっちで頼まれてやってますから」

「なんだべ、そうなんだ」

バンドの面々は顔を見合わせた。

チョビヒゲさんは「今日はカラオケしか用意してないからね。明日なら持ってくるけど」

「今日これからなんだわ」

「なんだべ、さっぱり期待されてないんだ」と皆がっかりである。

皆の冷たい目は、甘谷さんと五丁目の会長の方に向けられた。

全然気にもしていなかったみたいだ。

第七章 暑いデビュー

ジリジリと暑い土曜日だった。

セッティングするだけで汗が噴き出した。

演奏開始時間が三時の予定。一時には全員（ひとり欠けたが…）集合して、町内会の人々との打合せがあつて、段々と現実の模様が分かつてきて、皆イマイチ元気を失っていた。

そうはいつても今さら逃げ出すわけにもいかず、あとはただ頑張るしかなかった。

会場には、法被姿の子ども達がみこしの準備をしていて、ガヤガヤと騒がしかった。そんな中で、練習中のエレキギターとドラムの音に驚いたように、耳をふさいだりして不思議そうにこつちを見ていた子ども達もいよいよみこしを担いで町に繰り出す時間になっていた。

どうみても張り切って声を出しているのは親達で、子ども達はダラダラとこの暑い中を三丁目の方へ歩き出していった。

「じゃ、そろそろお願いします〜」企画担当の斉川さんというおじいちゃんが、こつちを見て合図してきた。

「ん？今から…」 「何故いまから？」

さっきまでいた子ども達と親たちはみこしを担いで会場を出ていった。目の前にはだれもいない。

遠くの屋台で準備している人達がパラパラ。暇そうな役員さんたちがテントの中に五、六人。犬の散歩途中のおじさん、買い物帰りのおばさんが横切っていく。小さな子どもの手を引く急ぎ足の若いママ。誰一人として音楽を聴くためにこっちを見る人はいない。ひどいデビューだった。

「んじゃやるよー」

ケンケンケンケン…元氣のないハナちゃんのスティックのカウントで始まった。

ドデドデドデ…ジャンジャンジャジャ…ベンチャーズ「パイプライン」がオープニング曲。

ジャーン。

二分もかからずにあっという間に一曲目が無難に終わった。

「みなさん、こんにちは。ブルーアトラスです」

「目の前に誰もいませんが、がんばりまーす」

「オープニングはベンチャーズの「パイプライン」という曲でした」

龍は少し大きめの声を出して、話し出した。何を話すか事前に考えていなかった。却ってそれが良かった。考えて話すほどの観衆ではなかったし、いや目の前には誰もいないし、一体誰に向かって話せばいいのやら…

「えー、私達はこの町内の人達が集まって作ったおじさんバンドです。リーダーの甘谷さんが声掛けをして五人集まり、今日は都合で四人ですが…、今年六月に結成。まだ二ヶ月たらずのバンドです。演奏できる曲もわずかですが、今日は夏祭りによんでいただきありがとうございます。」

「えー、それでは二曲目。ベンチャーズでダイヤモンドヘッド」

ダカダカダカダカ ジャンジャジャジャーン ジャジャジャジャジャーン

これも二分であつという間に終わってしまった。

「それではここで、メンバーの紹介をしまゝす。まずこのバンドのリーダーでベース担当、甘谷くーべーんと甘谷さんは音を出した。」

「この甘谷さんはとても几帳面な方で、練習曲の楽譜を全員の分、こまめに作ってくれます。とにかく音を出してるのが好きで、飯よりベースギターでしょっ」

「次にリードギターの榎藤」

テケテケテケ〜と大柄な榎藤さんはムスツとした顔をそのままに音をだした。

「え〜、怖い顔をしてますが別に怒ってるわけではありません。この方も無類のギター好き人間。技術的にもかなりのものです。ドラムのことを太鼓っていうのが、この人らしいな〜と思います」

「え〜、次がドラムス。花山」

ドドンと叩きながらニヤッとこつちを見て笑ってみせた。

「この花山さんは、バンドのムードメーカーです。とにかく明るい、とにかく酒が好き、ドラムが好き」

「そして、私がサイドギターの平井です。」ぺこっと頭を下げて自分の詳しい話はしなかった。

さ〜て、どのくらいの時間をメンバー紹介で稼いだろうか…。長い時間しゃべったような気がした。誰もいない、誰も聞いてくれない…空しい時間だった。

龍は気を取り戻して、「今日のメインイベント〜、五丁目の会長が歌います。どうぞステージの方へ〜」

会長は、役員テントから駆け足でさっそうと登場した。はじめて拍手が役員テントからパラパラと聞こえた。上機嫌な会長さんは、両手を挙げて役員テントに挨拶をしていた。いい気なもんだ。

「えー、今日は何を歌いますか？」わざと聞いてみた。

「じゃ、加山雄三の夜空の星を」

ケンケンケンケン：ハナちゃんのスティックがなった。

「僕のゆくところに ついておいでよ」

夜空には あんなに星が光る」

会長が興奮しながら歌い出した。マイクをギュッとつかんで大きな声を張り上げて…

歌い終わって、嬉しそうな顔で、へこへこしながら、いつものようにテントに小走りに戻って行った。これでようやくスタートから二〇分くらいは頑張っただろうか。持ち駒はまだ二曲あった。

「さーてあと二〇分か。」龍はとにかく前に進むしかなかった。

その時だ。

あの企画担当の斉川さんが手を挙げて、背伸びしながら両手を交叉させてる。顔も一緒に横に振っていた。

「ん？ なに？ もうやめろって？」

「え？ マジ？…」

「まだ、二曲あるよ」

信じられない顔をしてると、その企画担当の斉川さんがパタパタとこっちに向かって走ってくるではないか。

斉川さんは息を弾ませながら「みこしが戻ってくるみたいだから…もういいです」
一瞬時間が止まったような気がした。

「なにこれ」 というバンドのメンバーが顔を見合わせながらボーっと立っていた。

斉川さんは右手に御祝儀袋を握りしめて「これでご勘弁」といわんばかりのようであった。

ブルーアトラスの苦いデビューが終わった。

「もう絶対に出ね」

「俺ももう出ねわ」

「バカにするのもいい加減にしろ」

楽器を片づけながら、メンバーたちはそれぞれの思いを誰にぶつける訳ではなく口にしていた。

甘谷さんは無言だった。

ひどいデビューだった。

結局は二〇分間、階段のステージに立って、ベンチャーズを二曲、会長の「夜空の星」を一曲演奏しただけだった。一番時間を費やしたのがメンバー紹介であった。はじめから二〇分と分かっていたら、せめてベンチャーズのあと二曲もやれたのに…。

あの毎週土日に頑張った練習は一体なんだったのだろうか。

ブルーアトラスはもう終わってしまいそうな、そんな重い足取りでメンバーたちは会場をあとにした。

第八章 文化祭に初出演！

あの夏の暑さも、お盆が過ぎ、子ども達の夏休みが終わる頃にはすっかりと秋めいた風が吹くようになっていた。

ブルーアトラスは、あれ以来あまり練習をすることもなく、龍もダラダラと毎日を過ごしていた。たまに花山さんとエレベーターの前で会うことがあった。

「へーさん、この間坂口さんに会ったよ。あの時遠くのベンチに座って聞いていたってさ」

「ふくん。なんて言ってた？」

「うくん。別に感想は言ってなかったけど…」

「そりゃそうだね…あれじゃ、言いようがない」龍は苦笑いした。

「その時、ブルーアトラスに戻りたいようなことを言ってたよ」

「ふくん。ちょっと許し難いけどね。まあ本人の話しも聞かなきゃならないと思うけど…」

「今度は、秋の文化祭に出るんだよね…」

「うくん。それがデビューのつもりだったからね…」

「リーダーは、なんか言ってたすか？」

「最近、電話もないけど、そろそろ練習やらないとね…」

「この間と同じ曲やれば…いいんじゃない…」

「うゝ。それもどっかな…」

「へーさんの方からリーダーに坂口さんの話ししておいて…」

こんな内容の立ち話をした。

その二、三日後にこんな会話をしたことを、甘谷さんにも電話で伝えた。

「まあ、初めてのことだし、自信がなかったとは思っよ…坂口さんも」と龍は自分の気持ちも話しながら花山さんから聞いたことを話した。

「うーん。坂口さんの技術は、レベル高いから…もったいないしね」

「ほお、やっぱり見てるところ違っね」

「いや、指使いがいいもの…」

そう言われれば、ビートルズのリードギターのイントロなんかをたまに弾いてるけど、なかなかのものではあった。

「坂口さんは、ビートルズやりたいんだから、何曲かレパートリーにいられてやれば、やる気起きると思うけど…」

「うゝん、ビートルズは難しいからなあ…」

「初期の頃のビートルズなら、なんとかやれそうな気もするけどね…」

こんな二人の会話で、坂口さんの復帰は決まった。

秋の文化祭は、十月の第一日曜日が予定されていた。

市民センターには体育館が併設されており、館内には折り畳み式のステージもあった。

そのステージで発表する団体は日本舞踊、コーラス、詩吟、クラシックギター演奏などで、日本舞踊にいたっては五グループも披露する。コーラスは二グループ、そうそう大正琴の演奏もエントリーしてあった。

出演者はおばあちゃんパワーの集合で、観客も大体想像がついた。そんな中にブルーアトラスは受け入れられるのか…？ 龍は夏祭りに引き続き、またまた心配だった。

「すげえ〜出演メンバーだなあ、ばばあばかり…」花山さんはケタケタ、出演者の名簿を手にしながら笑い転げていた。

「ここでベンチャーズやって受けるの？」

「演歌でもやらないと…」

「いやいや、またこの間の二の舞でないよね」

復活した坂口さんも、また心配になってきた。

「とにかく、場数を踏んで、それからだから…」そう思うしかなかった。

文化祭の練習は、九月に入って毎週土日に集まった。坂口さんも復帰していた。その件では権藤さんは納得したというか、あまり興味がないというか、やりたければやれば…まあそんな感じの人だ。

文化祭まで一ヶ月。夏祭りの特訓と最悪の状況を経験したことが、逆に皆に余裕を生んでいた。選曲も夏祭りで必死に練習したベンチャーズと加山雄三に坂口さんのビートルズを二曲加えた。

坂口さんはリードボーカル担当で好きなビートルズに興奮していた。今までのおとなしいイメージは一新して楽譜をみんなに配って、細かいチェックをいれてビートルズの練習の時はどんどん引っ張り出した。

龍はハモリの部分を担当して、意外な自分の特技を発見したりしていたが、ビートルズと同じキーで歌うので龍には高い音は苦しかった。それにしても坂口さんの変わり様とキーの高さには驚いた。とにかく、ベンチャーズだけでなく、歌をいれることによってグーンと幅が広がった。

龍は最近思うところがあった。この地域を中心に活動するなら、ジャンルを広げて老若男女誰もが

楽しめるようなバンドにしていけないとダメだ。自分たちの好きな音楽だけでは地域には迎えられない…。演歌はどうかと思うが歌を入れて幅を持たせようとメンバーに言いだしていた。

文化祭の出演者の全体打合せが二回あって、ブルーアトラスの出演は、楽器やアンプの準備、片づけに時間がかかるということで、ステージ最後の出演になった。初出演でトリを飾る…。そんなに格好良いわけではないが、皆もなんか愉快そうだった。

そして「夕陽が丘秋の文化祭」は、めっきり秋らしくなってひんやりとした十月の日曜日の午前十時頃から始まった。

主催者側の長い挨拶、ようやく終わったと思ったら、同じような来賓の祝辞がたらたらと二人続いた。

いよいよステージ発表の開演。

伸びきったようなテープから流れる曲に合わせて立て続けに日本舞踊。それでも龍にはおばあちゃんたちの晴れ姿はそれなりに必死さがあって人生を感じさせた。また、コーラスの豊満なおばさま達のハーモニー、額の血管が膨れあがった詩吟のおじいちゃん、十人くらいでのクラシックギターの演奏、それぞれに一生懸命さが伝わるものがあつたし、地域を感じた。

若い頃には思いもつかない地域とのふれあい。おじいちゃん、おばあちゃん達と交わす言葉。そして準備に携わる人達の明るい表情…龍は今までに感じたことのない優しい気持ちに触れた。文化祭っかぁ、ジジババっかぁ、地域っかぁ、面倒くせゝ集まりだなぁと思っていたが、バンド活動がこんな優しい気持ちまで引っ張ってくれるとは夢にも思わなかった。

お昼弁当を食べて二時から三〇分がブルーアトラスのステージだった。

前の団体の出演が終了して、いよいよ出番だ。ドラムセットをあげ、アンプをあげ、マイクスタンドにマイクをセットして、音のバランスをみて、とにかく準備は忙しい。でも実はこの時間は結構気持ちが良い。演じる側にいる優越感というか、もしかしたら少しだけスター気分に一瞬なれる準備時間なのかもしれない。高いステージにライトが照らされて、観客の前に立つ。一度経験したら病み付きになるらしい。

観客席がザワザワとしてきた…。エレキの音やドラムスの音が流れだすと、体育館の入口から人が入り出した。さっきまでの観客との年齢層がはっきりと違ってきた。中学生や高校生も中年のおばさん達も興味深そうにステージを見上げている。さっきまで踊っていた日本舞踊の人達も椅子に腰掛けて観客の一人になっていた。役員も会場を準備してたおじさん達も最後のステージを聞こうと席についていた。

第九章 選曲成功！文化祭

「大変お待たせいたしました。演奏の準備ができたようです。」

ステージ発表の総合司会を務めていた初老のおばさんが、ざわついていた会場に伝えた。

「それでは、進行はブルーアトラスの平井さんの方にバトンタッチします」

白髪まじりの上品な感じのいいおばさんが声を高らかに、手を挙げながらエスコートしてくれた。

ケンケンケンケン…いつものハナちゃんのスティックがカウントをきった。

ドゲドゲドゲドゲ ジャーン ジャーン ジャンジャジャジャジャ

オープニングは、ベンチャーズのパイプラインだ。室内の音響は夏祭りの野外とは雲泥の差があった。とは言っても、中は中で音が天井や壁に乱反射してウァーンウァーンとやかましいくらいだった。それでもリズムに合わせて体を揺する人もいて、会場もブルーアトラスも最初から乗っていた。

テケテケテケテケ

ドゲドゲドゲドゲ ジャーン ジャーン ジャンジャジャジャジャ ジャーン

いいゝ、気分は最高。

一曲終わったところで、拍手がわいた。

ピーピーと指笛を吹く人もいて、場内は一気に盛り上がった。

「皆さん こんにちは ブルーアトラスです」

「オープニングは、ベンチャーズのパイプラインをお送りしました」

「もう一曲、ベンチャーズで ダイアモンドヘッド」

続けさまに演奏だあゝ

ケンケンケンケン：ハナちゃんのスティックがまたカウントをきった。

ハナちゃんも乗っていた。目と目が合う。ニヤツと笑い合う。

甘谷さんも坂口さんも榎藤さんも目の輝きが違っていた。

夏祭りや練習の時にはみせなかったチームワークが一边にいま生まれた。

ダガダガダガダガ ジャンジャジャジャン ジャジャジャジャジャン

榎藤さんのリードギターも調子がいい。

龍は観客に目をやった。

三列目の五〇才前後のおばさんが手拍子を取りながら、体を左右に揺らしながら乗っている。

あっちにも、こっちにもステップを踏みながら聞いている人がいる。小さな子供と踊ってる若いご婦人、朝から出演の日本舞踊の人達もいい顔をして応援してくれている。

ダガダガダガダガ ジャンジャジャジャーン ジャジャジャジャジャーン
テケテケテケテケ

ダイヤモンドヘッドも盛り上がった。

「どうもありがとうございます。」
メンバーは全員深々とお辞儀をした。

「いやー 嬉しいです。こんなにノッてくれて 本当にありがとうございます。」

あの夏祭りのことがあったので、龍は心から嬉しかった。

「どうぞ、気軽にステージの前に出てきて 踊ってください。ますますノッていきますので〜」

「次の曲は、ビートルズの曲でミスタームーンライト」

坂口さんがセンターマイクの前に立った。

今日は全員Gパンだったが、坂口さんはその上に黒のブーツを履いてキメていた。さすが唯一の三〇代。

ちなみに他のメンバーの履き物は、市民センターの名入れスリッパだった。

ミスタームーンライトは、スローなバラードで、南国のリズムのようなズンチャカズンチャカときれいな曲だ。

坂口さんの高いキーに龍もハモって気持ちのいい曲であった。

ミスター~~~~~ ムーン ライト~~~~ いきなり高い歌声で始まる。

ミスター ムーンライト~~~~

そしてハモリと演奏も同時に始まる。

こうして坂口さんの念願は叶ったのであった。

ウワァ〜という、拍手と一緒に場内はつつとりとした雰囲気包まれた。

やっぱりベンチャーズだけでは駄目だ。と龍は確信した。

「それでは、もう一曲ビートルズで、オール・マイ・ラビング」

イントロのギターの手で、二、三組の男女ペアがステージの前に出てきた。

歳は五〇代後半かもしれない。ジルバだと思う。曲が始まると軽快にステップを踏み出した。会場は一気に盛り上がった。坂口さんの念願のビートルズは良かった。

龍の「夜空の星」とラストにベンチャーズを一曲演奏して持ち時間の三〇分はあっという間に終わった。

選曲も大成功であった。ベンチャーズ一本やりのバンドからビートルズあり、加山雄三ありのバラエティーのある選曲がうけたのは確かであった。

あの夏祭りの時の無言で後片づけをした重い雰囲気は、この日はなかった。皆、笑顔とやり終えた満足感が身体中に溢れていた。

「これだよ！ブルーアトラスのバンドの生き方は…」龍だけでなく、バンド全員がきっとそう感じに違いない。

第十章 権藤さん辞める

ブルーアトラスは、年の暮れに市民センターとの共同企画でクリスマスコンサートを開催した。

企画は市民センターの若い男性職員からの依頼だった。

「実はクリスマスになんかやろうと思ったのですが…」

「ブルーアトラスさんのギター演奏でやりたいと思って…」と連絡してきたのだった。

「ブルーアトラスだけでクリスマスコンサートは時間的にきついと思いますよ。がんばっても一時間。ブルーアトラスだけの一時間は聞く方にとっては苦痛になるかもしれない」と龍は話した。

「他に出演できそうなグループはありませんか？」

「うーん、クラシックギターのサークルがありますが…」

この地域で活動しているクラシックギターのサークルがあって市民センターを借りて月に二回くらい練習をしているらしい。

それも抱き込んだら面白いかもしれないと、龍は逆提案を試してみた。

エレキバンドとクラシックギターのコラボで、それぞれ三〇分間の演奏。ジャンルの違うグループによるクリスマスコンサートは企画としては良かった。クラシックギターのサークルの代表者も「やりますか」と乗り気になってくれた。

ブルーアトラスは今までの曲に、クリスマススの曲をいれた。ベンチャーズのアレンジしたクリスマススの曲を挟んで一段と幅が広がった感じになる予定だった。

コンサート当日は五〇人くらいの人達が市民センターの和室に聞きにきた。クリスマスらしい飾りもステージに作って雰囲気もあったが、和室ではエレキのサウンドはうるさすぎるたかもしれない。予想通り年配の方には耐えきれない音だった。それに比べ黒いスーツで揃えたクラシックギターのサークルはとても良かった。完全にこの企画はクラシックギターにもっていかれた。でも、また新しい音楽仲間との出会いがあって、いいコンサートになった。

五月に結成したブルーアトラスは、夏祭り、文化祭、クリスマスコンサートと順調に音楽を通してその存在感を地域に知られるものとなった。思えば、充実した八ヶ月間はまさにバンド仲間たちとの新しい出会いだった。

一枚のチラシで集まった仲間がこれから地域の音楽の中心に向かって走っていくようになるとは、この時はまだピーンときている者はいなかった。

年が明けて春に向かう頃、むっとり権藤さんが「バンドをやめたい」と言い出した。

表情の少ない権藤さんは、その理由も「もういいかな〜と思って…」とはっきりしないままに、誰も引き留めるふうもなくあっけなくやめてしまった。

その数ヶ月あとにセブンイレブンの前でばったり会ったときに「う〜ん、いろいろ…」と本音をちらっと話してくれた。いつもあまり笑顔をみせず、淡々とギターを弾いていた権藤さんだったが別れ際に「また機会があったら誘ってください〜」とニコッと笑って去っていった。

ただ、バンドのリードギターをなくしたブルーアトラスにとつては大問題になってしまった。

「もうやめるしかないよなあ」とハナちゃんは投げやりになっていたし、甘谷さんは「リードギター募集しよう」とせっかくのバンドをつぶす気はないようだったが、いまいち前に向いている雰囲気はなかった。

そろそろ初夏を迎えるというのに練習もほとんどしないまま過ごしてしまった。このまま終わりそうな雰囲気であった。

そんな時だ。一本の電話が龍の気持ちを少し動かした。

「平井さん、ご無沙汰です。バンドやってるんだよね」

昔、二〇才の時に一緒に会社でバンドを作っていたベース担当の南城からだった。南城とは今でも一年に何回か同じ頃の仲間と一緒に飲むことがあった。南城は龍より一歳年下の実直ないいやつだ。

「今年ウチの町内会の役員をやってるんだけど、夏祭りにバンドよんだらどうって話したら、皆賛成してくれて。やってくんない」

龍は事情を話したが、心にはまた熱いものがこみ上げてきた。せっかくの話し、それも初めての他の地域からの話し、まして二〇才からの付き合いのある友だちからの誘い…断るにはもったいない。一応断らずに電話を切った。

さっそく、龍はメンバーに話した。

「やりたいけど…どうやって…」

「無理だよ。ヘイさん…」ハナちゃんは初めからあきらめていた。

龍には一つだけ考えがあった。

「ねえ、坂口さん。あんたの腕なら権藤さんの変わりが出来ると思っただけ……。どう……頑張っ
てやってみてくれない。ベンチャーズ何曲かとあとはビートルズと他でなんとかやれると思っただ
け……」

みんなの目が一瞬輝いて、一斉に坂口さんを見た。

「え、ベンチャーズじゃないし……私のあのギターでは、ベンチャーズの音は無理っす！」

「ギター？ ハナちゃんのギターはまだあるよね。オレ以前に借りてた、あれ」

龍はマイギターをクリスマスコンサートの際に買っていた。

「うん、あるよ。あれならベンチャーズ大丈夫かも……」

「なあ、頼むよ。返事はいますぐでなくてもいいからさ」

そんな話でとりあえず話し合いは終わった。

それにしても久しぶりのメンバーたちとの顔合わせであった。

坂口さんから連絡が入ったのは三日後だった。

「ヘイさん、あれから練習したんだけど、なんとかなりそうだから…」

「そっかぁ、ありがとな。よろしく頼むよ」

それを受けてさっそく龍は南城に電話した。

「夏祭りはいつなの？」

「八月のお盆の期間だね」

「わかった。引き受けるからよろしく頼むよ」

きつと坂口さんはかなり頑張ったのだろう。完璧主義というか、恥をかきたくない彼の性格は、去年の夏祭りの行動でよく分かっていた。しかし、今度は彼の頑張りがブルーアトラスを救ったのだ。

俄然、皆の目の色が変わった。

「今度の日曜は一時から場所とりしたから」甘谷さんもまたいつもに戻った。

「またやれる」とハナちゃんも元氣を取り戻した。

去年の夏祭りの坂口失踪？事件、そして今年の権藤脱退事件…。ドラマはまだまだ続く。

第十一章 坂口さん頑張る

坂口さんのベンチャーズはなかなか若さのある、音に張りを感じさせた。

時々ひっかったり、音を見失ったりしたが、あと三ヶ月、なんとか八月には間に合いそうな雰囲気になっていった。

龍がこの頃に見た映画にトム・ハンクスが音楽プロデューサーの役で主演した青春映画（題名がでてこない）があった。映画の内容はバンドを結成して人生や恋にぶつかる若者達を描いて面白かった。その時に演奏しているビートのきいた曲が最高にノリがいい。

「これ聞いてみない…」と映画で演奏していた曲の入ったCDをビートルズの好きな坂口さんに貸すと次の週には耳コピーしてきて楽譜も用意してきた。

「これ、格好いい曲ですよね。覚えやすいし。」

「うん。ビデオ見て一辺で気に入ったんだよ。」

「これ、やれそくだよね。」

「最初のドラムの入りがいいしね」

「どれ」とハナちゃんもCDを聞いて気に入ったみたいだった。

坂口さんはボーカルも担当してグイグイと引っ張った。龍もバックコーラスを担当してハモって気持ちよく歌った。

お気に入りの曲があっさりと三曲増えた。

一気に新生ブルーアトラスはよみがえった。それも今まではまた違った雰囲気…。ベンチャーズ主体のバンドからボーカル主体のバンドに生まれ変わった。

「これでいい…」と龍は思った。

そして、あの失踪？坂口さんが何かをつかんだのだ。

七月に入ると、地域の夏祭りの実行委員会からも七月下旬に開催の夏祭りに出てくれるように依頼があった。昨年のこともあったのでメンバーは腰がひけた。おまけに、「今回は一〇分でもいいから…。」とまるでバンドの存在感を無視した一方的なものだった。

メンバーは「断ろう」で固まったが、「来年は実行委員会になんとか夏祭りに出て頂けませんかと頭をさげさせてやるから…」と龍は今年も依頼を受けた方がいいとメンバーを説得した。リーダーの甘谷さんも同様の意見だった。

とりあえず、今年の夏は二本の出演が決定したのだった。坂口さんのベンチャーズも安定してきて、順調に練習もこなしていった。

夕陽が丘の夏祭り当日は、小雨がぱらついて夏にしては肌寒い夜だった。しかし、今年の出番は本祭りの日曜日の夜だったので人出は昨年とは比べものにならない。ギターもアンプも雨の中では気になったが、実行委員会はそんなこともおかまいなし…。

「この前辺りでやって」と役員たちのテントと会場中央に設置された櫓の間を指さした。白髪頭の背の高い役員だった。もちろんステージなど用意してるはずもない。全く横柄な態度である。

「時間と場所をあげるから…やらせてあげるから…」と言わんばかり…。

皆ムツとしたが演奏が始まった。挨拶も紹介もないまま、ハナちゃんのスティックがケンケンケンケンとカウントをとった。

ところが、今まで盆踊りを踊っていた住民たちがバンドの前に集まりだしてベンチャーズのサウンドに合わせて身体を揺らし始めた。やっぱり本祭りのこの人数とこの時間帯だよなと龍は思った。その光景を見て、すっかりメンバーたちの怒りは収まっていた。

「一〇分間三曲で終了すると」えゝ、もう終わりゝ」「もっとやったらゝ」の声があちこちから聞こえてきた。

それでも実行委員会は終了の合図。メンバーもそくそくとアンプを片付けてその場を後にした。雨

はいつの間にかあがっていたが、肌寒い妙な夏夜だった。

会場では、次のアトラクションでカラオケのジジババたちが大きな声で歌い出していた…。

寒さと実行委員会の態度と中途半端に燃え上がった気持ちのやり場に、メンバーたちの帰り足を重くさせていた。

それから二週間後、ブルーアトラスは南城の住む地域の夏祭り会場にいた。

「平井さん、ご無沙汰でした。」

大柄な南城がニコニコしながら迎えてくれた。メンバーたちとも挨拶を交わしてスケジュールの打合せがさっそく始まった。

ブルーアトラス初めての地域外コンサートである。演奏にはもうひとグループの参加があった。

「よろしく願いします。アンプ足りないのですお借りできますか」

「はい、どうぞ」こんな会話から始まった。

そのグループは親子バンドで、お母さんがドラムで息子と娘とがボーカル。あとベースとギターが一本の構成であった。そのバンドの女性は南城の高校時代の同級生だと言っていたが、親子のバンド

とはまたいいものだ。

この日は新生ブルーアトラスのお披露目だった。二週間前に地域の夏祭りで一〇分間の予行練習もしてきたが、新曲の発表は初めてであった。それも地域外での演奏はブルーアトラス第一回目の記念コンサートになった。

南城の奥さんも「あらゝ、平井さんお久しぶりゝ。よろしく願いますゝ。期待してますのでゝ」と挨拶にやってきた。龍は奥さんとも独身時代の頃からの顔見知りでハキハキとした話し方は相変わらずだった。

この夏は寒い日が多くて、この日も雨模様になった。体育館には子ども達五、六人がエレキとドラムの音に誘われてやってきた。体育館に入るとバスケットのボールでドリブルしながら遊んでいたが、エレキとドラムの音にバスケットには集中できない様子で座り込んでバンドの練習を聞いていた。

コンサートの始まる五時頃にはようやく大人の観客も増えて、演奏開始。親子バンドが先に演奏した。息子と娘のハーモニーをきかせたビートルズナンバーが新鮮味があって心地良かった。あういうビートルズもありだねゝと坂口さんと話した。

ブルーアトラスはベンチャーズ、ビートルズ、新曲のトム・ハンクスの映画音楽、加山雄三、バラ

エティーに富んだ選曲で、今までとはまったく別バンドになった。

南城も「平井さん、良かったよ。ありがとうございました。」

「観客がもっと多ければね、宣伝不足でごめんなさい」と謝っていた。

確かに、体育館は五〇〇六〇人くらいの観客だったが、それなりにバンドメンバーは満足していた。

六時半には演奏も終わり、機材の片付けも終わった。

「ご苦勞様でした。平井さん、これ少ないですけど」とお礼を頂いた。

「あと、飲んで食べていってください」と南城はメンバーひとり一人にビールをついだ。

自分達の地域では考えられない接待にメンバーは

「はあ、ありがとうございます」

「ウチの地域ではビール一本もでないですよ」と言いながらも上機嫌であった。

「どうれ、俺たちも盆踊りの輪に入って踊って盛り上げていくべ」と龍は南城の友情の気持ちに
応えた。

第十二章 高田夫婦との出会い

秋の文化祭に参加するメンバーの打合会が八月末の日曜の午前中にあつた。

この年の夏は異常低温とかで寒い日もあったりしたが、この日は妙に残暑が厳しくTシャツが少し汗ばんだ。

龍が市民センターの玄関に入ると

「おはようございます。平井さん、今年もやるんでしょう」といつも練習の予約を取るときに顔を出してくれる事務員の佐藤さんがギターを弾く真似をしながら玄関ホールにいた。

「今年も是非盛り上げてくださいよ」と横にいた大柄で人の良さそうな所長もニコニコしながら話しかけてきた。二人はボードに市のポスターを貼っているところだった。

市民センターの職員の中では、バンドの出演は文化祭の来場者獲得に大いに期待しているようで、毎週のように練習で顔を出しているブルーアトラスのメンバーとセンターの職員とはとても身近になつていた。

「平井さん、お茶でものんでいったら」と所長が誘ってくれた。

「時間まだあるから、ご馳走になりますね」

ソファアに座ると、所長が自分のノートパソコンとA4のプリンターをもってきて

「最近、パソコンの調子が悪くて…」

「どうしました？」

「プリントがうまくできなくて…」

「どれくらいと見せてくれますか？」

「なあゝんだ、インクのカートリッジの入れ方がこれじゃだめだよ…」

こんな会話をしながら龍は事務室で談笑しながらコーヒーをご馳走になっていた。

「しかし、平井さんは音楽の話しをしていると子どものような目だね…」と少し年配の事務員の渡辺さんが横から話しかけてきた。

「私も音楽好きだから、ブルーアトラスのファンなんだよ」と今年は文化祭の企画担当のこともあって、渡辺さんの力の入れ方もいつもと違って見えた。みだつた。

文化祭の打合会は一時間で終わった。文化祭の参加メンバーは昨年とほとんど同じで、出し物もあり変わったとは思えなかった。ようするに文化祭はマンネリ化していた。そんなところにブルーアトラスの出現は文化祭そのものに活気を生んだ。いままでは日本舞踊、詩吟、コーラスの出演者が入れ替わり出てくる。日本舞踊なんぞは同じ人が違うグループ名で踊ったりしている。まるで敬老会の

集いのような感じだった。

町内会の年配の一部の役員にはエレキバンドは受け入れられないもののようではあったが、ブルーアトラスは夏祭り、文化祭の出演者の目玉になってきたことは役員も認めざるを得なかったし、ブルーアトラスの存在は地域にしっかりと根付いてきたようだった。

ブルーアトラスの演奏時間は三〇分。準備の都合もあることから今年も一番最後に演奏することになった。

秋の文化祭は今年も十月の第一日曜日に開催された。

日本舞踊などのテープを回してる担当の人がやってきて

「音響の方を担当してる高田です。今日はよろしくお願いします。」と話しかけてきた。体格がよくて人なつっこいキョロツとした目が印象に残る人だった。

音響といっても市民センターには設備が揃っているわけでもなく、バンドとして依頼するものは何もなかったが、アンプをステージにあげたりセットしたりのお手伝いしますので言ってくれた。

文化祭は午前中から高田さんの回すテープに合わせて日本舞踊がなんども入れ替わり踊っていた。

その合間にコーラスがニグルーブ、詩吟、太正琴、クラシックギター、車いすダンスなどが次々と披露されていた。特別盛り上がる訳でもなく、プログラム通りたんと消化されていた。

いよいよブルーアトラスの出番になった。オオトリである。今回はブルーアトラスのロゴをプリントしたトレーナーを揃えて着たみた。坂口さんの去年のブーツ姿は今年は市民センターの名入れスリッパに変わっていた。

「今年はブーツは？」と茶化すと「イヤー、皆さんに合わせますよ」と頭をかいていた。坂口さんも仲間に溶け込んだなあ〜と嬉しい龍だった。

高田さんと途中から高田さんの奥さんの手伝いもあって、ブルーアトラスの準備は順調に進んだ。高田夫婦は「いいなあ〜、私達もやりたいなあ〜」といいながら、バンドのジャンルやらメンバーのことやら色々聞いてきた。

「なんなら一緒にやりますか〜？」

「楽器はなんかやってるの？」甘谷さんが調子よく奥さんに声を掛けていた。

「キーボードやります〜、ドラムも叩けます〜、旦那はなんにも〜」

奥さんの方は女性バンドを組んでいるらしく、すぐにも一緒にやりたい様子だった。

龍は準備の最中の話と聞き流してはいたが、ブルーアトラスはその後六人のグループに膨れあがることになってしまう。

文化祭では南城の町内会の夏祭りで演奏した曲を選んだ。その後の練習時間もあつたので余裕をもつてやれた。結成二年目でブルーアトラスの力は素晴らしく安定していた。これで音響設備のあるところでやれたらなあーと欲も出てきているところであつた。

文化祭は昨年に増して盛り上がった。やっぱりジャンルを広げたのは成功だった。年齢層の幅が広い地域での活動には、一つのジャンルに絞るのは難しい。年配の人達にも懐かしい曲を演奏しないと聞いてくれない。三〇分間の演奏はアンコール曲もいれて無事幕を降ろした。

楽器の片づけをしながら、高田夫婦は甘谷さんと話し込んでいた。

六人かあり、まとまるんだろうか。甘谷さんはちゃんと考えているんだろうか…。

せっかく落ち着いたブルーアトラス、何もなければいいのに…と心配性の龍は思っていた。

その後、新たなコンサートの予定もなく、だらだらと龍たちは過ごしていた。バンドの練習もいまいち身が入らずにいたが高田夫婦からの催促はきていた。「練習はいつですか？曲は？旦那もボーカ

ルで参加したいんですけど構わないですか…」という連絡だった。

当然人数が増えれば、それなりに音の迫力は増す。キーボードは甘谷さんの希望とするところでもあった。あとはどう上手くまとめるかだと龍は思っていた。もちろん、技術的なこともあるが、高田さんの奥さんの経験からすると大丈夫そうだし、自信もありそうだった。

第十三章 初合宿！

物事が進んでいるところに途中から入っていきつとすると、そこに混ざっていくにはそれなりに気が合わないと言血でもするかのように拒絶反応を起こしてしまふ。同じ考え方、同じ雰囲気とか、どこかに接点がないと難しい。ただ音楽はその点すぐに仲間にはなりやすい。しかし、好きなジャンルが同じだというのが条件になる。違っていると長くは続かないし、簡単に壊れてしまふ。それに我慢する必要もないのだ。

高田夫婦がバンドに参加したのは文化祭から二ヶ月も過ぎてからだった。

奥さんのキーボードは大丈夫そうだった。譜面を見ながらすぐに演奏に参加できた。女性バンドではドラムを叩いているらしく、ドラムの方が得意だと何度か言っていた。

一方旦那さんの方は曲選びに苦労したが、GSから「ブルーシャトー」「想い出の渚」チューリップの「サボテンの花」をとりあえずやることにした。高い音は苦しうなのでキーを下げざるを得ない。すると楽譜のキーを変更して作り直さなければならぬ。なかなか前に進まなかったし、本人も途中諦めかけていた。

「誰でも最初はうまくいかないから」龍は初めの頃の自分を思いだしていた。龍も一緒にコーラ

スしながら高田の旦那さんはなんとか練習を休まずに参加していた。

そして、奥さんのキーボードは「青い影」と「スタンバイミー」を坂口さんのボーカルでやることにした。この二曲はキーボードと坂口さんの歌唱力がハマってまたまた新しい持ち歌が増えた。まだまだ荒削りではあったが雰囲気があつて、これはいけるとみんなが思った。

六人のブルーアトラスは、その後の練習も来年の夏祭りまでなんとかすればいいという中で、それぞれが焦ることなく順調に曲数も増え、ベンチャーズ、ビートルズ、オールディーズ、和製ポップスも含めてジャンルの広さがブルーアトラスの特徴になっていた。

練習が終わったある日。

「うちの会社の別荘があるんだけど、みんなでギターもって行きませんか？」と高田の旦那さんから誘いがあつた。

「合宿！いいですねー！行くべー！」花山さんがもう決定かのように喜んだ。

「音を出しても大丈夫なの？」

「まあ、私が別荘の管理の責任者だから…。大丈夫ですよ」

「酒を飲みながら、別荘でバンド練習かやー！リッチだー」

酒好きのハナちゃんはもうはしゃいでいた。

結局、六月の土、日を利用して別荘地での合宿となった。

初夏を思わせるような土曜の朝、車二台に便乗して向かった別荘地は、なるほど山奥の静かなところで、リッチな人達が建てた立派なログハウスの別荘がたくさん建ち並んでいた。高田さんの会社の別荘もその一角にあつて二階建ての大きな建物であつた。「おー！すげえ」とみんな顔を見合せて喜んだ。こんな近くに、こんな場所があつたなんて初めて知つた。それにしても流れる風が木の香り運んできて心地よかつた。

この静かな場所で、エレキギターの爆音はどんなものかと思つたが…。その心配は必要なかつた。その夜は、さすがにギターはみんなの側に置いてあつたが、まずは飲めや食えやの宴会になつてしまつて…。

気がつけば、バタバタと次から次と寝込んでしまつし…。

リーダーの甘谷さんだけが、ひたすらギターを弾きながら宴会のBGMを担当していた。

龍も酒は強くはなかつたが、別荘での夜の雰囲気には飲まずにはいられないものがあつた。

高田さんもハナちゃんも坂口さんもよく飲む。思えば、バンドを結成してから飲む機会はほとんどなかつた。甘谷さんが下戸なので、そういう席を作ろつとしないかつたこともあつた。

その夜はエレキの音より酔っぱらいの声の方が近所迷惑…と思うくらいの賑やかさの中、いつの間にかみないびきを立てながら眠り込んでしまった。

次の日の朝、さすがに全員遅くまで寝ていた。散らかしっぱなしのままの酒臭い部屋。二日酔いの四人。唯一しらふの甘谷さん。

ようやく部屋の片付けが済んで朝食を終えると、「少し練習しね、せっかく合宿だし」とリーダーの誘いに、みんな「うーん、やるべが」と動き出したが二日酔いの顔にはやる気はまるでなかった。

それでも、なんとかお昼まで音をだして、ブルーアトラスの初合宿は終わったはずだったが、まだ続きがあった。

合宿の帰路。途中にウィスキー工場がある。「見学かたがた飲めるんですが寄りますか」と高田さん。「もちろん」とハナちゃん。また、そこでも飲むは、飲むは…。周りの見学者からは白い目で見られるし、リーダーは機嫌が悪くなるし…。

さんざんな合宿となってしまった。

六月の合宿の成果はまるでなかったが、音楽以外での付き合いも深くなってそれはそれで意味があったのかもしれない。

一泊二日の合宿はお互いに近い存在に思うようになったのだ。逆に言えば段々遠慮がなくなって、物事をはっきり言うようになった。今までは音楽一辺倒の付き合いで少し味っ気がないとも思ってたから龍はいいことだと思った。

しかし、それにしても高田さんとハナちゃんはよく飲む。へべれけになるまでとことん飲む。そのうち酔った勢いでぶつからなければいいのだが…。

夕陽が丘のマンションに帰ってきたのは夕方。ハナちゃんは自宅まで肩を貸さないとまっすぐ歩けない状態だった。エレベーターに乗せて六階まで。

「すみませ〜ん、いつもご迷惑かけてます〜 あんた、起きて!」

ハナちゃんは奥さんに腰のあたりを叩かれながら、片目半分だけ目を開けて、奥の部屋へ這いながら消えていった。

第十四章 町内会の役員になる

龍はこの年、町内会の班長の役が輪番制で回ってきた。「四月から班長ですのでもよろしく願います」と向かいの伊澤さんからの一方的な連絡であった。

「町内会の班長…一体何をやる人なの？」

龍には「市民だよりを配る人」くらいの認識しかなかった。

とにかく地域活動にはまるで興味がないまま今まで過ごしてきた龍にとって「町内会の仕組み」「町内会の仕事」がなんなのかさっぱりと理解していなかった。

数日後の日曜日、町内会の班長会議に出席した龍は、言わなきゃ良いのに意見を述べてしまった。進行があまりにもノロノロしすぎで、さっぱり決まることが決まらない。

「私もよく理解していなくて申し訳ないのですが、もう少し分かり易いように説明をしていただいても、もう少し速やかに議事が進行するようにしていただけませんか」

それだけの意見を言っただけなのに、あちこちから拍手が湧いた。皆さんもそう思っていたのだろう。

しかし、それが役員になってしまいうっかりとなってしまうのだ。

ようやく議事が進行して、最後の役員の選考になると、また、ノロノロとさっぱり決まらない。挙げ句の果てに「じゃんけんで決めますか…」という状況だ。それでも少しづつ決まって最後の総務部長がどうしても手がない。

困った議長役の人が龍の顔をみると、眉毛を八の字にしながら

「平井さん、ぜひ総務部長を引き受けていただきたいのですが…」

「いや、とんでもない。全然内容がわからないし…」

「なかなか引受けてくれる人がいなくて、毎回人選で四苦八苦するんですよ」

「一年間、お名前だけでも…」

「すみませんが、私も忙しいものですから…ちょっとご協力できかねます」

議長役の人とこんなやりとりがあったが、会議の間ではついに決まらなかった。

それから何度か自宅に電話をもらって、龍はついに議長役の人の押しに折れてしまった。

「名前だけです。本当に…」

「はい、あとは私の方でバックアップしますので…」

「よろしくお願いします」

「は、はご。」

結局、あの議長をやっていた人は副会長、龍は総務部長になってしまった。

その後、町内会の会合はひと月に一回のペースで開催された。内容は町内会費の集金やら防災訓練のおしらせやら細々とそれなりに仕事があった。名前だけといえども責任はある。それなりにやらざるを得ない状態だった。「やっぱりなあ」もう遅かったが総務部長になったことを龍は後悔していた。

「平井さん、今度連合町内会の夏祭りがありまして」今度の会長さんが言いだした。

あゝ、あの例の夏祭りの話であった。

「それで、ウチの町内会からも連合町内会の方に役員として出なければならないのですが、平井さんもメンバーの一人でいいですか？」

「はあゝ、それで何をやるんですか？」

「えゝと、ウチの町内会の今年の役目は…警備ですね。あとテント張りも数名出てくれとの要請です」

「警備ですか」

「まあ、個人的にバンド演奏で出ますので、その日は一日現場におりますから…」

「えっ！バンドですか」 知らなかった」

龍がブルーアトラスの一員だったことが、急に明るみにでてしまった。

なかには、「あゝ去年も出てましたよねゝ、文化祭もゝ」と知ってる役員もいて、この人がゝという感じで興味があったのか周りの態度が変わった。とにかく、「警備もやらざるを得ない」ことになってしまったのだ。

結局、龍は連合町内会の夏祭り実行委員のメンバーにもなっていた。

去年の夏祭りに「夏祭りのこの観衆の中でバンドがやりたいすよねゝ」とハナちゃんと本祭りの日の人の多さにビックリしながら話していた。町内会など興味もなく無縁の龍ではあったが、これを実現させるにはいいチャンスが巡ってきたのかもしれないと密かに期待感もあった。

龍は町内会の色々な内情も知ることができた。連合町内会の会長、副会長、総務、夏祭りなどの企画をやる人、町内を仕切る年配の人など、この人達の中に入り込んで事を動かすにはかなりのエネルギーが必要になりそうだ。果たして龍達の夢を分かってくれる人はこの中にいるのだろうか？

ただ今年の夏祭りの準備は、いつもの手順で上の方からの指示に従って動くだけで、新米の龍には意見を述べる雰囲気さえなかった。

それでも、今年のブルーアトラスは三〇分の時間をもらって、櫓のステージでやることにはなっ

た。しかし、時間が早すぎる。前夜祭の四時半スタートでまた観客なぞいない時間帯だ。ようするに景気づけというやつでエレキの音で「夏祭りが始まったよ」の合図みたいなものだ。基本的な考えは去年とまるで変わっていない。メンバーの中には「今年もこれすかや、やめましようよ」という意見もあった。しかし、龍はなんとかして夏祭りを音楽祭に変えてやりたいくらいの意気込みがあったので、「我慢してでるべ」。夢実現するからさあ」と皆をなだめた。

夏祭りの当日、龍はテントの設営が終わって、役員の休憩場所になるテントの中で冷たいウーロン茶を飲みながら座っていた。

「ご苦労さん」と頭の禿げ上がった人の良さそうな七十過ぎのおじさんが龍の側に寄ってきた。

「二丁目の加賀です」とニコニコして話しかけてきた。

「バンドやってんだよね」

「オレ音楽大好きなんだよ」

「カラオケもやるしね」

「そうですね。夏祭りにやりたいんですが、どうやって進めていったらいいものか分からないでいたんですよ」

「今年はどう内容が決まってるから駄目だけど、来年、私の方から提案してやっから…」
「本当ですか！それなら私の方で企画を立てて出しますのです。」

「んだね。そういうものがあつた方が、話が早いから」

「まず、今年は時間があまりないけど、櫓の上でやるようにしたからがんばって演奏して。楽しみにしてるからっさ」

とその加賀さんはどっこいしよと腰をあげて他のところに行ってしまった。

加賀さんは二丁目の会長で連合町内会の副会長をしていた。少しでも可能性ができた気がした。そっかぁ、年なんか関係なく音楽の好きな人はいっぱいいるんだなあ、頑張ってみようかとその時思った。

さて、夏祭りは開会の宣言、実行委員長の挨拶があつて、ようやくスタートした。

まだ明るいし、暑いし、人も少ない。でも屋台がいっぱい出て、BGMが流れ出して子ども達がポップ集まってきた。奥様達は夕食の準備で忙しい時間帯だし、旦那さん達も西日の当たる暑い内にバンドを聞きにくる人はそうはいない。

それでも、ブルーアトラスは重いアンプを櫓の上に運んで、準備に忙しかった。今までに比べれば場所も時間も長くとってもらって少しは良くなった。櫓の上は機材と六人のメンバーでいっぱいになった。「狭いけど眺めはいいな。まずはいいとしますか」文句を言ってたハナちゃんも演奏の時間が迫ると気持ちは高ぶってきてるみたいだった。もちろん高田夫妻も櫓の上にいた。

今回からあのヒゲのPAのおっちゃんが音響を手伝ってくれて、スピーカーも大きなものを揃えてくれた。PAのおっちゃんとその家族とはこの後も何年かいい付き合いをさせてもらった。

新生ブルーアトラスの演奏は今年も相変わらず人のいない前で始まった。音響も以前とは比べものにならないくらい良くなったし、演奏自体も色々なジャンルが増えて厚みが増した。残念なのはとにかくそれに気付いてくれる観衆がいないということだ。練習を重ねてここまでやれるようになった町内バンド…。町内の人だけで集まって作ったバンドは珍しいと思うのだが…。もったいない話である。

来年は加賀さんに企画書を出して、その辺りをアピールしていかなければ、ブルーアトラスはいつになっても認められない。ようやくその糸口をつかみかけている。もう少しだと龍は諦めていなかった。

櫓の上は意外に風が強く、楽譜立てが次から次から倒れてドタバタ…。リーダーが一人機嫌悪い顔をしてたのが印象に残った夏祭りだった。

第十五章 ある施設のライブ

暑い夏祭りが終わって、秋風が心地よい季節になり始めた。龍達は次の予定もなく練習もひと休みしていた。

「夕陽が丘に若葉の郷という身体の不自由な人達の施設があるんだけど、私その人達と知り合いがいるのね」

「そこの人達って音楽にすごく興味があって、大好きなんだよね」

「この間、そこで働いてる人と話したんだけど、コンサートを企画できないか聞いてみたの」

「どうかしら」

「へへ、そうなんだ。」

「いい話だよね。」

「で、ブルーアトラスの内容は話したの？」

「それにエレキバンドの音で大丈夫なの？」

「うん。結構いままでも色々なバンドがきてるみたいだよ」
「プロもきてるみたいだから、かなり耳は肥えてるらしい。」

「へー、そうなんだ。ブルーアトラスの音楽で大丈夫かや」

「一回その担当の人に会ってほしいんだけど」

「いいよ。じゃ日取りだけ決めておいてくれる」

電話の相手は高田夫人である。

若葉の郷の担当者とは高田さんの電話から一週間くらいして会うことになった。

龍はこの施設の存在は知っていたが初めて中に入った。清潔な明るい施設である。

高田夫人と一緒にホールに入ると担当の男の人が高田さんを見つけて、挨拶しながら早足でこちらに向かってきた。

「こんにちは」

まだ若い感じのいい優しそうな男性だ。さっそく名刺交換をしてホールの隅にあるテーブルで打合せが始まった。

「ブルーアトラスは、夕陽が丘町内だけのメンバーで構成されてるバンドで…」

「ジャンル的には、ベンチャーズ、ビートルズ、オールディーズ、和製ポップ…」

龍はいつもの説明をその担当者に説明した。きっと、龍よりふた回りは年下だと思う。

「古い曲ばかりだからね。うけないかな」ちょっと心配になって龍は聞いてみた。

「いいえ、ここにいる人達は年配の方が多いので、かえってその方がきつとうけると思います。」

「それに、地域の人達という安心感もあるし…」

「氣を使わないし、とてもいいと思います。」

話しは、トントン拍子にやりましょうという方向で決まった。

「ステージはないのですが、このホールは患者さん達が集まって談話する場所です。」

「ここで、いつもコンサートをさせていただいてます。」

そこは、清潔感のある、天井が高くて、コンサートの会場としてもとても素敵なホールになると龍は思った。立ち話をしながら、若者は色々と説明をしてくれた。

「プロの方もここでやられますが、音響がいいと誉めてくれます。」

「プロってどなたがきたんですか？」

「在郷のミュージシャンの方が定期的に来てくれますし、東京の方も結構きますよ」
「そうですか。我々みたいな素人でもいいんですかね」

「いや、ぜひやってください。お願いします」

ということとで、十月にブルーアトラスのライブが決定したのである。

もちろん、メンバー全員が大賛成であった。

第十六章 感動の施設のライブ

十月半ばの少し肌寒い日曜日の午後、メンバーは車から楽器や機材を降ろしていた。

「よろしくお願いしま〜す。」

先日打合せをした若者が玄関に出迎えてくれた。

「こんにちは。今日はよろしくお願いします。」

顔を合わせる全ての人が「こんにちは〜」と挨拶をしてくれる。

この施設で働いてる人は若い人が多く、みなさん感じのいい職員だった。

玄関を抜けるとすぐにホールがある。明るくて清潔なホールの壁側に一段高く台を並べてステージを用意してくれていた。ホールはすっかりとコンサート会場に生まれ変わっていた。

「あそこいいですか？」

「台はもっとありますので、狭ければ…」

「いや充分ですよ。ありがとございます」

「音の調整をしますので、音が高過ぎたら言って下さい」

「はい。分かりました。じゃ、他になんか必要なものがあれば言って下さい」

若者は自分の仕事に戻っていった。

楽器とアンプを運んでセッティングして音を出してみる。本当に音響のいいホールで演奏が楽しかった。もちろんメンバーの表情は今までにはない最高のものだった。

思えば、夏祭り、市民センターの体育館…決して演奏場所に恵まれていた訳ではない。今日のこのホールは最高の演奏場所となった。

入念に音のチェックをしていると、音に誘われて会場に入ってくる患者さんもいた。ほとんどが車椅子の方達で言葉も不自由な方達である。

そういえば、あの若者に「患者さんには、気に入らないと途中で部屋に戻ってしまう方もいらっしゃるの、その時は気にしないでください。」「みなさん聞き慣れているというが、自分に合わないと聞かないで帰ることが前にもありましたから…」と言われていた。

音の良さだけで有頂天になっている訳にはいかなかった。いつもより厳しい観衆になるかもしれない。

「ただいまから、ブルーアトラスさんのコンサートが始まりますので聞かれる方はホールに集まってください。」女性の声で館内放送で案内が流れた。

自分で車椅子を動かせる人。付き添いの方に押されてくる車椅子の人。職員の人。広いホールはすぐにいっぱいになった。

あの若者が、マイクに向かって挨拶を始めた。今日のコンサートの内容とブルーアトラスの紹介を簡単にしてくれた。そして、こちらに目で合図を送ってきていいよいよオープニングだ。

今回は観衆の反応が気になってはいたが、いつものブルーアトラスの演奏をするしかない。まずはベンチャーズのパイプラインで始まった。

ケンケンケンケン

いつものハナちゃんのカウント

ドゲドゲドゲ ジャジャーン ジャジャーン

デケデケデケデケ ジャーン

「皆さんこんにちは。ブルーアトラスです。私達はこの町内で活動しているアマチュアバンドです。今日はとても楽しみにしてきました。音はうるさくないですか？」

「はぁい。大丈夫ですよ」と腕でOKをだしてくれる人もいて安心した。

「えゝそれでは、ベンチャーズの曲をもう一曲やります。ダイヤモンドヘッド」

ベンチャーズサウンドは年配の方には意外となつかしさがある。身体を揺さぶる人もチラホラいて職員の人達からは手拍子も起こって、幸先のいいスタートになった。

メンバーもいつになく微笑みながら、会場は徐々に一体化していくような雰囲気だった。

ビートルズ二曲、オールディーズ二曲、高田さんのGS、歌をまじえると会場では一緒に歌ってくれる人も出て、すっかり和やかなライブになってきた。

龍は一番左に立っていた。いつもの場所だ。リーダーの甘谷さんが右端、次に坂口さん、高田旦那さん、ドラムのハナちゃん、そして高田奥さんのキーボード。

龍は目の前にいるおばあちゃんがさっきから気になっていた。職員に付き添われているその人は演奏が始まると、耳に手を添えて下をずーっと見ている。うるさいのかな、気分がわるいのかな、と様子を伺いながら龍は司会を進行させながら演奏を続けた。

ブルーアトラスの演奏するすべての曲がこれほど上手く聞こえたことがない。コンサートは充実したものだ。音響の良さとみんなの緊張感とたつぷり時間があつたことなど、今までにはない環境だった。

四〇分過ぎるくらいで、予定の曲をすべて演奏し終わった。

あの若者がステージの方に一礼をして、合図をすると花束をもった車椅子の方々がメンバーにひとりずつ近づいて手渡して握手を求めてきた。嬉しかった。自分達の演奏がこれほど受け入れられたのは初めてのことだった。それも不自由な方々に喜んでもらって「良かったよ、良かったよ」と言葉にはでないんだけど、心からそういつているのが伝わってきた。

龍は思わず涙がこぼれた。バンドを始めてこれほど嬉しい経験をしたことがない。

「ありがとうございます」と礼を述べるだけで、若者に挨拶を求められたが言葉がでてこなかった。

「アンコール、アンコール アンコール」職員のかげ声と共に手拍子が湧いた。

嬉しかった。メンバーも感無量の顔をしていた。

「本当にありがとうございます。それでは、もう一曲ベンチャーズの曲をやります。」

曲が終わって、患者さん達は職員に付き添われる人、ひとりで部屋に戻る人、それぞれにホールをあとにした。龍は帰り通路側にいたので、ひとりひとりにお辞儀をすると、みんな手をさしのべて握手を求めてきた。「ありがとう、ありがとう…」みなさん嬉しそうな目をしていた。龍の目の前にいた人も帰りに寄ってくれたので「うるさかったですか？」と尋ねると「うん。よかったってかったですよ」と付き添いのひとが代わりに話してくれた。そしてそのご老人は手をさしのべて握手をしたのだった。

龍は目を真っ赤にしていた。ふと、メンバー達を見るとポカーンとこっちを見ながら後片づけが始まっていた。

「スターだよ。ハイさん。」ハナちゃんはクスクスと手を口にもっていつて笑っていた。他のメンバーも半分あきれた顔をして、こっちを見ていた。

「ありがとうございました。」若者がやってきた。

「途中で誰一人部屋に戻る人がいませんでした」「今までにはなかったです。驚きです」とちょっと興奮しながら頭をさげていた。